

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Diary of Hisakatsu Hijikata (I)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001075

土方久功日記 第1冊

1922年7月6日～10月5日（大正11年）

解 説

この第1冊は、93頁しかなく、他に比べ紙数が少ない。表紙には、「千九百二十二年七月六日ヨリ」と記されているが、現存する日記では、7月12日の途中から始まっている。この時期、1ページに1～3日分記されていることが多いので、おそらく数枚取り去られたのであろう。日記の原本を見ると、何枚か破られた跡が認められる。丸山尚一氏が年譜を作成した時（1977年～79年）には、既に7月11日までのものは失われていたようである。また、現存の日記の第1頁には、久功自身により「1」のナンバーがふられているので、久功の生前には既に失われていたと考えられる。

したがって、この第1冊には、大正11年7月12日の途中から10月5日までが収められていることになる。ほかに、巻末の部分に、本からの抜粋等（8頁）、幼い頃の思い出が記されている。

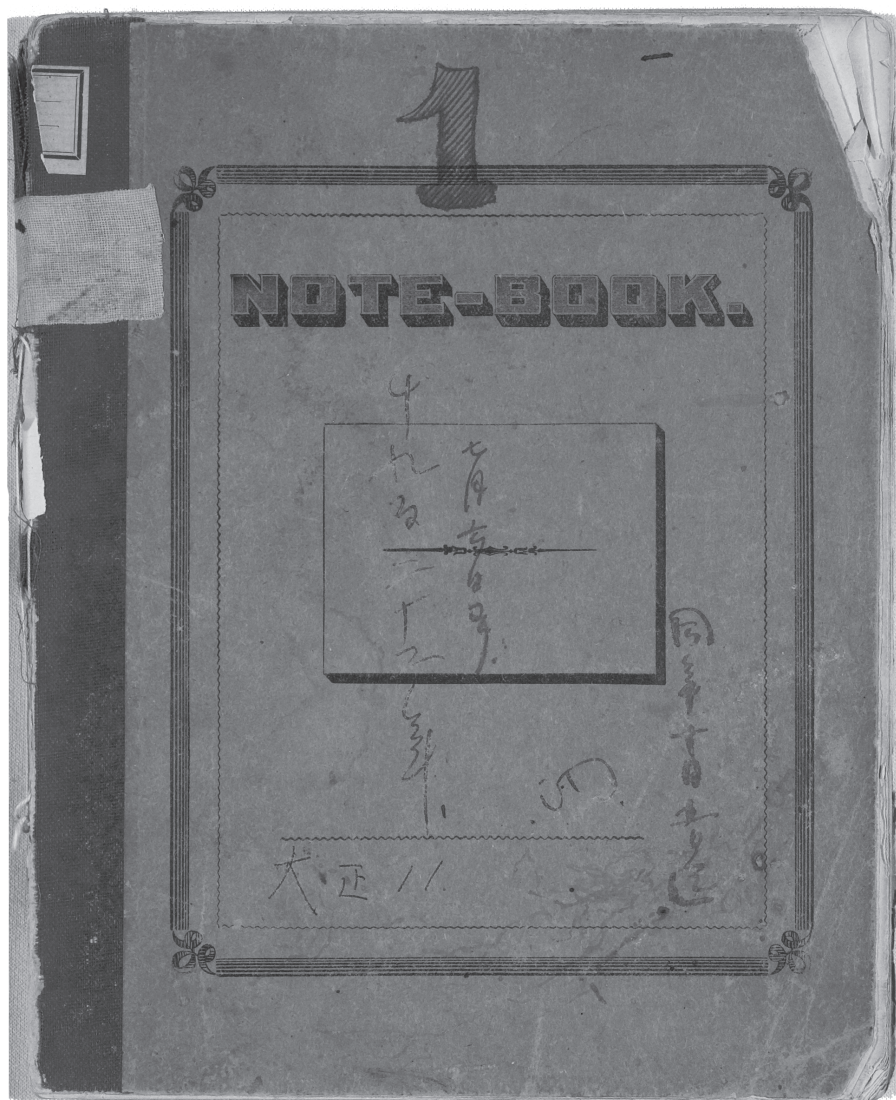
久功は、この夏休み、麹町六番町の家を離れ、美術学校の後輩、中井惣之助と「笹塚」に家を借り、ひと月余暮らした。そこには、近代的な考えを持っていた山口昇を中心に周辺の様々な人々が集まっていて、一種のコミュニティーが形成されていた。当時の「笹塚」（京王線・笹塚駅の近く、現在の世田谷区大原1丁目）は、住宅も少なく、周囲はほとんど田畑や雑木で、牧場もあり、すぐ近くには玉川上水が流れていた。

日記の書き出しは、ほぼ毎日、「今はない懐かしいお父様」、「亡き父上に」等となっていて、この日記が、大正8年9月に亡くなった父・久路に語る形で記されているのが分かる（ただし、この年9月30日までで、以後日記の文中には見られない。代わって、第2冊から第7冊までは、表紙の裏面に、「今は亡き 懐かしき父上に」、「衷心の親愛を以て 亡き父上に」等と記されている）。

この第1冊のなかで興味深いのは、久功が自身の人格について述べていることである。ストリンドベルヒの『地獄』を読んで、「私もつくべ近代人であることを感じました。」と記し、ついで次のように述べている。

「而して、私は前から気がついて居たことに裏書されるのです。自分の中には太古の野粗で純朴な人格と、病的にまで繊細で懊悩的な人格とが——こうした全然反対な二つの人格が、私の中を並行して流れて居ることを知りました。」（8月1日）

6年半後の南洋行きが、すでにここで予言されているようである。



第1冊表紙

[表紙]
[1 千九百二十二年七月六日ヨリ 同年十月五日迄
大正 11

功]

[表紙裏]
[今は亡い 懐かしい お父様へ]

[見返し]
[×を附したる部は 原稿紙に書き直したもの]

〔7月〕

〔12日〕

今日は、先達の自像を石膏にし様として、型だけ取りました。つい二三日前、今度こそは少しはいいと思って居たのが、愈々石膏に取るとなると、まだ―物足りない気がしました。明日から又一つ自像を拵へ様と思ひます。誰か座って呉れる人があると尚いいと思ふのですが。

夕方、兄上¹⁾が来て下さいましたので、夕食後、向の家へ行つて、皆で又トランプをして十一時半頃までも遊びました。

十三日

今はない、懐かしいお父様。今日も一日愉快でした。

午後二時頃でしたか、たかちゃんがうどんをもって来て呉れました。うどんを食べてから、惣ちゃん²⁾と散歩に出ました。久々で昼中畑道を歩いて好い気持でした。キャナル³⁾の向側の方の、とある百性屋^{〔姓家〕}で麦をうって居ました。惣ちゃんは其処に画板を置いて、茂った木々に囲まれた広場をかきはじめました。其の間、私は又畑中をどんどん歩きました。とある小川のはたで、野の子等が五六人で魚をとって居ましたので、半丁程も手前でスケッチブックに、中の小供を背負った子を写生して居ました。それに気がつくと、子供等は半分毒意を含めて、

「画いてもかまはねえよ」、「おれを画いてくんな」などおらんで居ました。其うちに、中の一人が私の居る道をかへつて来ました。かなだらひの中にたなご^{〔タナゴ〕}を入れて居ます。私の所へ来て、見せて呉れと云ひますから、スケッチを見せてやりましたら、子供は一目見て、「おーい、〇〇ちゃん、おめーが赤ん坊おぶってるとこ画かれたぞ」、と叫びました。他の子供等は、我れ先きにと駆け出して来ました。私はスケッチブックから其の紙をやぶいて、其の子供にやりました。「おれにもくれよ」、「おれも画いてくれよ」、と五つ六つ一度に手が出ました。私はよいことを知りました。彼等は自分が画かれることを厭って居るのではありません。それが画家自身の為であることを（而して彼等が汚れた見苦しい風をして居る為に）侮辱と考へて居るのです。ですから、画いたものをそっくり彼等に与へてしまふと、彼等は安心もし、非常な興味さへもって呉れます。

夕食後、^{〔惣〕}そんちゃんときみえさん⁴⁾と一緒に、会社の方からキャナルへ出て、大原橋⁵⁾の方までも小一時間散歩しました。家へかへってから、今日一日優しい気持であつたことを思つて、鉛筆で自画像を一寸画きました。いつになくすなほな可愛らしい自分が出来ました。先達中のは、何か影の中へ頭を突き入れて外をかいまみて居る様に思はれます。

今日は私の誕生日でございましたが、何にもしませんでした。よかつたら明日何かし

度いと思ひます。

十四日

朝のうち、町に出様と思ひましたら、きみえさんが一緒に行かうと云ひますから、二人でキャナルに行きました。とりとめもないことを話しながら、小学校の方までも行きましたので、一寸ダリヤ園をのぞいて見ました。帰りに町でお昼のものなど買って帰りました。お昼からきみえさんが私の御誕生のお祝だと云って、ゆであづきをもって来てくれました。おいしく食べました。きみえさんは、五時過ぎまでも遊んで行きました。

夕方、たかちゃんと、としちゃんとが前の芝生⁶⁾で遊んで居ましたので、惣ちゃんと裸足で飛び出して、一緒に駆っこをしたり、とびっこをしたりして遊びました。

お湯に入ってから一人で大原橋の先きまで散歩しました。遅く月が上りました。

今はない、懐かしいお父様……

十五日

今はない、懐かしいお父様。今日は、朝から家⁷⁾へかへりました。

お昼から高⁸⁾のお母さんが来られて、夕方近くまで話して行かれました。夕食後、笹塚⁹⁾へかへりましたら、君江さんが犬をつれて散歩し様として居ましたので、直ぐに一緒に散歩しました。キャナルへ行行って長いこと腰を下して居ました。星が光ったり、^{〔雲〕}雲にかくれたりして居ます。今日はおぼんで、町では夜店が出て居ると見えて、大分町の方に行ったり来たりして居ます。新宿の方でも、おぎくぼの方でも、花火がしきりに上って居ます。帰って来ましたのは十時頃でした。

今日家へ帰りましたら、庭には一面に雑草が伸び広がって居ました。昼日中、その草を分けて、沢山のばか掠鳥がおりて餌をあさって居ました。ほんとに馬鹿の様なとんきよな鳥ですが、又可愛らしい鳥です。

今日は夕方、保¹⁰⁾ちゃんが遊びに来て呉れたのですが、丁度君えさんと外へ出て居たので、大変に失礼してしまひました。

十六日

今はない、懐かしいお父様。お午過ぎ、一人で守山公園¹¹⁾に行行って、いつもの木蔭の草原に長いことねころんで居ました。木の葉は明るく美しく透いて、其の合間合間からは、真蒼な空が高く澄んで、白い薄雲が後から――飛びました。

夏の日中の森は暫し風も透らないで、水気の多い空気がじつとりと肌をとりまいて居ます。声一つなくなりました。突然、森の深みから、鯛が一つなきました。二つの声が応へました。もう森中鯛の声になってしまひました。私の寝て居る頭のすぐ上までも。

日がかたむいて、そろ――散歩する人などが見えて来ました。夕御飯の支度もしなけ

ればなりません。読みさした、今はない青木¹²⁾の歌集をとちて、ぼつ―家にかへりました。

夕食まで惣ちゃんとテニスをして居ましたら、小石川¹³⁾から電報が来ましたので、食後すぐに小石川へ行きました。今サン¹⁴⁾が来なかった為に仕事も出来ず、和サン¹⁵⁾とキサチャン¹⁶⁾とアサリサン¹⁷⁾とでお酒を飲んでしまひました。小石川に宿しました。

十七日

今はない、懐かしいお父様。蒸し―した暑い日でした。夕方までも皆でくだらない話などして過してしまひました。夕食後、笹塚へかへりました。

十八日

今はない、懐かしいお父様。今日は朝のうち、縁側の前のコスモスの花を見てこんなことをふと思ひました。

若し雨の日が今日多かったなら
この花は昨日咲いたかもしれない
或は花卉がもう二分大きかったかも知れない
或は全然駄目だったか

〔×を附す〕

と。而して、それからそれとそうしたことを考へて見ました。

いつかお父様と仔犬を埋めたことも、はじめから終まで、事実から原因から、感情まで、根ほり葉ほり思ひ出して見ました。そしたら、丁度あの時のお父様と私の寂しい笑があっただけでした。朝皆が出ると間もなく、十時頃でしたか、きみえさんが遊びに来ました。十二時過ぎまでも遊んで居ました。

私の歌だの詩だのを読んで居ました。それから啄木の歌集や白秋の歌を読み合ひました。帰る時に青木の歌集をもって行きました。

お昼から、あまりとしまらないので、先達の石膏の型に石膏を注ぎ込みましたが、石膏が少しばかり足りませんでしたので、型も破らずそのまゝになってしまひました。

夕方、たかちゃんや、たかちゃんの兄サンとテニスをしました。それから近所のたかちゃんの友達などもまじって、暗くなるまで駆っこをしたり、鬼ごっこをして居ました。すっかりくたびれてしまひました。一日いやな暗いお天気でした、雨が降ったり、少しばかり日が輝いたり。併に夜になってすっかり晴れたと見えて、私が一廻り散歩して来た時には降る様に星が輝いて、何時の間にか天の川がはっきり見られる様になって居ました。

十九日

今はない、懐かしいお父様。一日よいお天気で、気持好うございました。

朝、惣ちゃんが出るとすぐ、八時頃から、惣ちゃんの大きな画架と十二号のキャンバスとをもって出かけました。守山公園のずっと先の方で画架をすゑて書き始めました。十二時近くまで、ぶよに喰はれながら、殆ど夢中で書きつゝけました。風景を真面目で画いたのは、はじめてです。そして十二号のキャンバス！空は美しく、つまさき上りの、両側草に蔽はれたライトレッドの道が、その美しい空に尽きて、その境界は美しい曲線を書いて居ります。道の左側は、ずっと手前に一本大きな常盤樹があって、先は一面の畠になり、右側は雑樹林です。坂道の中腹には、長い紐でつながれた赤い牛が自由に歩き廻ったり、草を食べたりして居ます。夏の白雲が飛ぶので、照ったり影ったりします。

帰った時には、お腹はすくし暑いし、へとへーになってしまひました。併し本当に気持好く画けました。自分としては、技巧を云へば本当にぢれったくなるばかりでしたが。

午後日中、きみえさんが岩本園に行かないかと誘って呉れましたので、大原橋の方からキャナルを通して岩本園に行きました。大型の綺麗なダリヤを少し買って来ました。私も一本もらって来て、花活けにさしました。

夕方はまた、たかちゃん達とテニスをしました。今お風呂から上って書いて居ますと、向ひの方のはなれた家から、美しいオルガンの音にまじって、優しい讃美歌が聞えて来ます。「やまじこえて」だの「めぐみのひかは」だの、家中で歌って居ると見えて、男の声々の中に交って、二人程女の歌ふのが聞えます。なつかしい歌ばかりです。丁度あの頃、私が毎日曜に、南湖院¹⁸⁾の「お集り」に行つては、看護婦の橋本さんや中沢サンから教へて貰ったものです。私も一緒につけて、小さな声で口誦んで居ります。

懐かしいお父様。あの頃のことが色々思ひ出されます。

二十日

今はない、懐かしいお父様。何うしたことでございませう。今日は朝から気がくさへして仕方ありませんでした。何にもしないで一日ぐずへして、午からは惣ちゃんもひどく勞れてしまつて、二人で横になつてうつへして居ましたら、小石川から電話で呼ばれましたので、四時頃から出かけました。大した仕事もなく、四時過ぎまでも、何やかやして過してしまひました。

二十一日

今はない、懐かしいお父様。八時頃に起きました。十時頃から梅子¹⁹⁾さんと二人で朝飯を食べて、十一時半頃家へかへりました。二時半頃に英子²⁰⁾さんが出て来ました。三時頃には笹塚に帰りました。晩方、先達の絵を持って惣ちゃんと、たかちゃんの家へ遊びに行きました。十一時過ぎまで遊んで居りました。

二十二日

家へかへりました。兄上と帝劇²¹⁾にピアストロを聞きに行きました。

今はない懐かしいお父様。マチネーは一時半から開演でした。兄上と十一時半には帝劇の前に行って居りましたので、一時間程も待たねばなりませんでした。待つ間、あの角のベンチに行って、腰を下して居ました。すぐその道路の工事のお昼休と見えて、私の側に同じベンチに、汗臭いシャツ一枚の労働者が二人、お弁当を食べて居ます。大きな箱には御飯がぎっしり押しつめてあります。而して隅っこの方に小さな焼魚が一きれ入って居ます。お弁当箱のふたに汲まれた水を、その一角からちゅちゅと吸って居ます。焼きつく様な日と、遠慮のない風埃を小さな桜の木の影によけて、彼等は今、許された小さな喜びと休とを、おとなしく手に受けて居るのです。

私は混沌と又夢中の様に、私の心の中で、傍の労働者等に向って話しかけて居ました。「暑いですね、君達、僕は併し君達を羨く思っているのです。こんな失敬な云草を許して下さいね。」

ところで、君達は実におとなしい。君達は君達に与へられたものをよく知って居る。そして貪らない。

君達は君達自身に対して、本当に礼節正しく振舞って居る。

そこで一寸僕を見て呉れ給へ。越後ジョーフ^{〔上布〕}の着物を着て、セルの袴をはいて、金時計（尤も三十年も前のものだが）をさげて、新らしい下駄に足袋をはいて、而して二円五十銭捨て、これからピアストロのヴァイオリンを聞かうと云ふわけです。

ところがこの着物、袴、時計、何一つほんとの僕のものぢやないのだ。足袋は洒落にはく以上に、下駄を汚さない為なのだ。二円五十銭も、もともと僕のものぢやない。それで居て、これから二三時間の間、ヴァイオリンを聞くのだ。

僕は一月拾幾円かのわずかな金で命をつないで居る。而してその拾幾円も、自身のものぢやない。それでも今こうしてピアストロを聞くのだ。

これが僕の今の生活なのだ。何うか憐んでくれ、笑ってくれ。

毎日毎日こうして暮して居るのが僕なのだ。何か刺戟を求めて、ぶく〜と何かにぶつかって呉れとばかりに浮いて居るのが、僕の生活なのだ。

眠りきって居る者は、又一つの幸福をもって居る。

そして、僕は、覚めかけて、覚めかけて、年中覚めかけて居る。こんなつらいことはないよ。

僕は結局、僕に本当にすっかり金がなくなってしまった時、其時こそ君等の様にもなれるのだろう」って。

（而して少しでも金のあるうちは、多分駄目でせうよ）

幕が開いてピアストロが出て来て、ヘンデルのソナタの最初の音が響いた時、もう

先の気持は、まるであとかたありませんでした。次々の綺麗な綺麗な音節に聞き惚れるばかりでした。ウキニアフスキーのコンチェルトに続いて、数々の小曲がひかれるうちには、考へなんか何処かに行ってしまうしました。(そして少しでも金のあるうちは、多分こうして居るでせう)。

而して、笹塚に帰って来ると、ここには又々まるで別な世界がありました。何も知らずにがらっと唐紙を開けると、「あ、今一寸話しが」。私は、失礼と云って唐紙を閉めてしまいました。蒸す様な三疊に、食卓に押し攻められて、室田²²⁾ サンと君子²³⁾ サンとが寄り添って座って居ました。君子サンは泣いて居ました。私は袴だけぬいで直ぐ外へ出ました。あなたがたはよく、人がさうされる様に、あの執念い、そして、馬鹿力のある一つの影に導かれて、甘い甘い、併しひどく痛いあの密^{〔蜜〕}を嘗めたのではありませんか。

〔×を附す〕

二十三日

今はない、懐かしいお父様。今日は、君子さんにおむすびを拵へて貰って、惣ちゃんと稲園サンと三人で、スケッチ板をもって、写生に出かけました。道々随分暑うございました。いくらいっても暑うございました。十時頃キャナルの上流の所へ画架をすえて、惣ちゃんと私とは画をかきはじめました。午後、惣ちゃんは、一つうまく画き上げました。私はてんで仕事が出来ませんでした。止めて、皆で川端でお弁当を食べました。町まで行ってサイダーも買って来ました。それから又上へ上へと上りました。どこまで行っても暑うございました。

吉田園のずっと先きまで行きました。皆もう画く勇氣もありません。^{〔贊〕}三人大讃成で、下高井戸²⁴⁾ から電車にのって、玉川原²⁵⁾ へ遊びに行きました。

玉川では裸になって泳ぎました。水が浅い上に真水で、あまり気持がよくありませんでしたので、間もなく上りました。四時半には家へかへりました。惣ちゃんは、早速画きかけの画を続けに出かけました。其間、向のうへへ行て居ましたが、園ちゃん²⁶⁾ も、きみえさんも、御宿へ行てしまつて、ひっそりして居ました。惣ちゃんも私もすっかり労れてしまつて、御飯を拵へるのが面倒でしたので、二人でおそば屋へ行て、五銭のもりそばをたらふく食べました。

二十四日

今はない、懐かしいお父様。朝から八号のキャンバスを持って、昨日の所へ出かけました。而して昨日画きそこなつた所をまた画きました。十二時までかかつて画き上げました。^{〔複〕}随分複雑な構図と色と調子とで、思ふ様には行きませんでした。帰って先達のと比べて見ると、ずつといゝ様な気がしました。

帰りがけに代田橋²⁷⁾の向ふの小さなお宮²⁸⁾の所へ来かかると、お宮の杉木立の向ふ側から一人のみすばらしい姿の単衣物を着た、まだ五十にはならないと思はれる男が、あやうげに何か不思議な手まねをしながら道を横切りました。みすばらしいなりをして居ますが、背丈が高く顔立も立派で、髯をはやし、前こごみで頭を少しかしげて物思はしげな沈鬱な表情をして居ました。

而して道のはづれまで行って、又不思議な手まねをして、くると向き直りました。私は何か、此のあたりの悲しい中老の男が、或る迷信（彼等の信仰）によって、例へばお百度の様なことをして居るのかと思ひました。それで、男が又元の方に向いたので、前を横切るのを控へて立止りました。すると男は私を見て、又何か手ぶりをしました。私は何だか解らないので、男を見守ったまゝじっと立って居ました。すると男は、一寸見よと云ふ様な手つきをして、前こごみになって、道端の埃に指で何やら書きはじめました。私の顔を見ては、字を書きはじめました。私はじっと見て居ました。確かな筆法で、何か漢字が三つ四つかゝれ、そして仮名が二つ程書かれました。然し埃が深くて、何を書いたのか読むことが出来ませんでした。

男は再び私を見て、通れと云ふ様な手ぶりをして、丁寧にお辞儀をしました。私は男が、謙譲な唾であると考へましたので、私もお辞儀をして通りました。男は其の間に二三次又丁寧にお辞儀をしました。町の子等はけげんな顔つきをして、此の様子を見守って黙って居ました。

無言の話を（而して恐らく両方共何も解らなかった話を）、晩にきみ子さんにこの話をしましたら、それは唾の狂人なのだそうです。併し、もと学校の教師をして居た人だとの話でした。そこで私の想像は、いくらでも広がるのでした。元学校の先生（字は沢山しってる筈です）、それに少の乱暴をしません。而して黙って居ます（若し先生が本当なら、先天的な唾ではありません）。ここには多少の懷疑が許されます。そして、非常に謙遜で敬虔です（町のまつりの翌日は、朝早く神楽堂の近所をきれいに必ずはくさうです）。此処には、ほんの少しばかり、何か悲しい暗示があります。併しまだこれでは、私の種々の想像は空想に過ぎないでせう。今度逢ふ時には、何か話しかけるなり、何かの法方^{〔方法〕}で近い見度いものです。^{〔ママ〕}

二十五日

今はない、懐かしいお父様。一日何ともなく、ぐづぐづ過してしまひました。晩方、惣ちゃんとかかちゃんの処へ行つて、十一時頃まで遊んで居ました。今日は、たかちゃんのお嫁に行った姉さんが来て居ましたし、郎君の小林サンと云ふ人も来て居ました。お昼前にあまり退屈でしたので、ぶらぶら方々歩いて来ました。岩本農園に行ったら、^{〔睡〕}水蓮の花が綺麗に咲いて居ましたので、買って来ました。きみえさんの所にも二輪、赤と白と上げました。別の厚いがらすのこぶに浮かせて、机の上に置きました。惣ちゃ

んの所にも一輪さしてあります。香の高い美しい花です。

二十六日

今はない懐かしいお父様。お昼頃から、久しぶりで雷がなって雨が降りました。朝まで蒸し――して居ましたのが、涼しくなりました。^{〔睡〕}水蓮の花は今日も美しく咲きました。一日だるくて朝から何もしませんでした。昼からは横になって、一時間半程もうと――して居ました。夕方、惣ちゃんに私の肖像を一枚画いて貰ひました。晩にはきみちゃんの所で十一時過ぎまで遊んで居ました。きみえさんは近々に、長崎に帰ってしまふさうです。私もここに来てから四十日にもなります。そして、あと三四日で家へかへり、其後は又鎌倉²⁹⁾へでも行き度いと思って居ります。此の三四日、何かなしに寂しい気がします。金があったら、軽井沢へでも行って、四五日皆と思ひきって遊び度いものです。ここも好いのですけれども、皆ばら――になって、方々へ行ってしまったので、少し淋しくなりました。一つには、海に入り度い気もして居るのです。

二十七日

^{〔欄外に記す〕}
[笹塚三十日分³⁰⁾ totalsum 8.96]

今は亡い、懐かしいお父様。急に今日から家へ帰ることにしてしまひました。十一時頃でしたか、家へかへりましたら、昌ちゃん³¹⁾と秋庭³²⁾サンの武ちゃんとが遊びに来て居りました。ぎゃあ――騒いで居りました。

お昼を食べてから、昌ちゃんと武ちゃんとは、兄上がつれて鎌倉へかへりました。何だか勞れて居りますので、ごろ――して、あれでも幾らか寝たかも知れません。

晩方、久頭³³⁾サンが鎌倉からひょっこり帰って来まして、間もなく関口サンが遊びに来ました。お父様が肺を患ひなされたので、明日お国へ帰って、お父様をおつれして平塚に来られるのださうです。相変らず散々人を笑はせて帰って行かれました。併し、関口サンの言葉は、とりとめもなく彼方此方へ飛びまはって居るのが、私には何だか寂しく思はれます。自分を欺いて居るのです。而してそれを人に気どられまいとして居るのです。

二十八日

今はない、懐かしいお父様。朝のうちに若井さんに行つて来ました。上下二本療治しなければなりませんので、明日から暫らく通はねばなりますまい。帰りに古本さんに行きました。久子サンが相変らず気持よく相手をして下さるので、お昼近くまでも話して居ました。午後二時過ぎから、久頭サンと笹塚に行きました。十時頃までも遊んで居て、残つて居る荷物をもって帰りました。

二十九日

今は亡い、懐かしいお父様。一日重たい雲がかかって、蒸々と風もない暑い日でした。夕方、前の通をぶら〜歩いて居ましたら、ふと松金サンの前を通って、新しい木札が目につきました。読んで見ましたら、中野の方に引越されて、門もひっそりと閉って居ました。角まで行きましたら、愛生病院の所にも今井サンの辺にも、蒸々と風もない夕方、百日紅がただれた様に真紅に動きもしません。急に思ひついて家へかへって庭を見ましたら、これは又、家の百日紅は花一つ咲いては居ませんでした。所在なさにゴーガンのノアノアを出してひろひ読みに七八十頁読みましたが、いつ読んでも誘はれる様な美しい気持がします。もう寝ようとして居る処へ、祖父様³⁴⁾が昌道をつれて出て来られました。

三十日

今はない、懐かしいお父様。朝のうち一寸学校³⁵⁾まで行きました。上野は博覧会が明日で閉会と云ふので、それは大変な人でした。現金なものです。学校に行きましたが、^(生)相憎日曜日でしたので、誰も来て居ませんでした。久保田³⁶⁾氏と小室³⁷⁾が来て居ました。学校から動坂の石膏屋に行ってみましたが、まだ型ばかりで、手がつけてありませんでしたので、そのまゝ笹塚へ行きました。惣ちゃんが居なかったの、君ちゃんの所で昼寝して居ました。今日で荷物も何うやら皆持って帰れさうなので、牛屋サン³⁸⁾にも行って挨拶して来ました。夕飯まで食べて帰って来ました。帰る時、きみえさんにも、一寸挨拶して行かうと思ひましたら、惣ちゃんが大きな声で、「きみえさん、土方君がお別れをしたいのですって」と、どなりました。それが何だか妙に變に聞こえました。ほんとに別れと云ふものはいやなものです。君えさんも出て来て、「お帰りますか。もう多分、若しかしたらお目にかゝれませんかも知れませんわ。八月末まで居りますか何うか」と云つて私の顔を見て私の一寸物考へ意居ました。思はれのはそれに人には自分で知人に云はれてこゝろに氣付くこと知れませんね。月がだん〜に太って来ます。

夕方驟雨が来て、少しは涼しくなりましたが、昼間は九十一度³⁹⁾もありました。

三十一日

今はない、懐かしいお父様。からりと晴れ渡って、美しい朝でした。かん〜と日が照りつけましたが、風は冷え〜して居ました。午さがりから遠くで雷が鳴り初め、だん〜と近づいて居ましたが、雨もふらず、東南の方に去ってしまひました。それからは、雲が多くなって、夕方は、夕照に映えて、色とりどりの美しい雲間に深い蒼空が見えて綺麗でした。

朝、齒医者に行っただけで、一日うちにいて、ゲーテのエグモントを読みました。

〔8月〕

一日

今は亡い、懐かしいお父様。ひどく若井さんで待たされましたので、昼前はつぶれてしまった様な気がしました。今日は、大好きなストリンドベルヒの^{〔獄〕}地獄を読みはじめました。まだ大して沢山読めませんでした、それはすてきな本です。ストリンドベルヒの尊い――自叙伝です。私もつく――近代人であることを感じました。不意に何か知らないものに、どしんとぶつかって、大きな闇に包まれます。気がつくと、道は一町も先の方にあるのです。びっくりして又進みだすと、今度は思ひがけない、併し近代人が病的に慕って止まない悪魔が赤い舌を出して居ります。こうしてどん――どん――走ります。引摺られて行くのです。無神から神へ、神から無神へ、而して科学から哲学へ。

而して、私は前から気がついて居たことに裏書されるのです。自分の中には太古の野粗で純朴な人格と、病的にまで繊細で懊悩的な人格とが――こうした全然反対な二つの人格が、私の中を並行して流れて居ることを知りました。

自然人としての私の歎息と憧憬とを、ゴーガンは都会をはなれた最初に、いみじくも叫んで呉れました。「人々は都会を去るや否や、生きんが為には自然に頼らなければならぬ。自然はゆたかである。自然はしみったれではない。そして、誰れにもその宝物の分配を拒まない。それらは、無尽蔵に木に山に海に貯へられてある。然し人々は、高い木に攀じ、山に登り、重い獲物を担うて返ることを知らねばならぬ。人々は魚を捕へ水に潜り、石にかたく着いて居る貝を海の底ではがすことが出来なければならない――一人は知らなければならない、出来なければならない」と。

而して、ストリンドベルヒは、千の苦痛、千の蹉跎の後に、私達に、唯一つの許されたものを暗示して呉れます。それも墓地で。

「おゝ、唯一の希望に悩むものこそ福なるかな！

斯く墓地は自分に運命を予言した。恋は了った、金は了った、名誉は了った！十字架の路、そのみが叡智に導く」と。

夕方、綾サン⁴⁰⁾がまりちゃん⁴¹⁾をつれて来て宿りました。

晩には久頭サンと散歩ながら、九段下まで買物に行きました。

青い海が見度くてなりません。

二日

今はない、懐かしいお父様。今日こそは、一日何にも致しませんでした。一日だらしく^{〔獄〕}地獄を読んで居ただけでした。読みながら、まるで色々なことを悩ましいことを考へたりしてあまりはかどりません。綾さんも帰らず、まりちゃんはまがなすきかな⁴²⁾ポツンポツンピアノを弾きます。兄上は間がなすきかなヴァイオリンを奏きます。母上⁴³⁾

は間がなすきがな愚痴と小事をならべます。布団屋が一日綿の粉を散らします。一番おとなしく働らいたのは植木屋達です。

三日

今は亡い、懐かしいお父様。何うしたことでございませう、此の五六日、何ですか、少しもとりとめがありません。色々のことを次から次へと考へます。そして一つとして或る程度まででも考へることがありません。空は一日曇って重たく押しつける様です。となりの石屋は朝から暑いのに、ごつん——石をたたきます。本は読めません。金がないので外にも出ません。自分の家に帰って来ながら、少しも落着かないのは何うしたことでせう。雨もばら——降りました。一度引込んだ月が、また寝る頃には朧ながら明るく照り出しました。^{〔雲〕}曇が切れて、優しい星も煌きます。明日はきっといい日であることを思ひます。

四日

今は亡い、懐かしいお父様。昨夜の^{〔漠〕}莫然とした希望も、すっかり裏切られてしまひました。朝歯医者に行きました。一時間余もまたされて、いよ——治療にかかります。

そっと落着いて居る歯をほじくられます。小さなきざりのメスが歯の中で、やたらとかきまはされます。痛い！いや痛いと感じる余^{〔裕〕}祐もなく気持が悪い！変な予感に圧せられながら、それでもちっこらへて居ます。最後にいきなり、ぐわーんと頭の中で何かが破裂します。と、あたりの人々の声が何故か遠くの方の小語——いち悪い口ぎたない——の様に！

而して耳は更に油蟲の羽音、鈍い羽音を聞きます。

窓外の太陽に直射された物乾台がぐら——と揺れて、目には霧と陽炎とが残ります。而して鼻だけが鋭敏に、そこらに並べられた毒薬を一々嗅ぎ分けます。

ぐる——廻りの様の中に、頭だけがいやに静かに省みます。而して直ぐ頭の中に浮んだのは、昨夜の暗示です。十時頃庭に下りて居ますと、どとーんとひどい物音がして、木の葉がざわ——揺り動き、ごーっと暫らくは脅す様に、地鳴が止みません。まった——、そんなことを思ひ出しちゃいけない！あれはただ三^{〔丁〕}町目の電気局のモーターが、偶然暴発したまでだ。たいしてありふれたことでないまでも、極めて分りきったことだ。(地^{〔獄〕}獄が私を憶病にしたのでせうか？いゝえ、私は今迄に何度も常に感じて居るのです。唯、自分で力めて否定して居たまでなのです。只、裏書されて、恐れと慰めが一緒になって、私を困らせるのです)。気がつくと、私は体中につめたい汗をかいて、顔は真青になって居ることを知ります。医者は平気で、只ほんの十五分ばかり休ませて呉れます。そして、又薬をさします。又明日いらっしゃいと追ひかへされます。家へかへると、頭から上左側の平面は、痺れた様に重たく動悸して、嘔吐に近いいやな気持がします。昼食まで寝

ます。が、直りません。ますます痛さがはっきりして来ます。お昼から英子さん^[中沢]が出て来ました。英子サンは冷たい井戸水で冷して呉れます。そして、一時間程してやっと少し落ち着きました。

夕方、綾さんとまりちゃんは帰りました。

夕方、美しい茜色の空に、十日程の月が出ました。美しいルナ・メイドは真横を向いて浮き出て居ます。明日こそは！いいえ、明日にならなければ何とも解りません。

五日

今は亡い、懐かしいお父様。太陽はギラギラと照りつけます。歯医者は又々よくありませんでした。家へかへると昼まで、まるで疲れきった人の様に眠ることも出来ず、横になったまゝ、じっと痛みをこらへて居ました。昼から大分楽になりましたので、何か仕度いと思ひます。全く眠ることも出来ず、一向に考へることも出来ず、することもなく半日過ぐすと云ふことは、たまらないことです。で少し気分が落着くと、本をとり上げます。読もうとすると、字は目をはねっかへします。

英子さんは放たれたもの、食るものの様によく喋ります。隣の石屋はまるで意地悪く、急にごつん―ひどい音を立てます。而して左の半面がガーンと熱くなります。それでも、風呂から上ってさっぱりすると、又本をとります。而してやっとのことで、先達から読めないで居た地獄^[獄]を読み終へます。

而して何故ならば、ストリンドベルヒは、斯くもお父様に似た運を負って居ることでせう。愛に悶えた点で、聡明で寛大な為にあらゆる運命に虐げられた点で、而して最後まで耐え得た点で、所有女の悪に虐げられ戦ひながら、而かも女を愛せずには居られなかったことも。

夕食後、皆で銀座へ出ました。熹朔^[伊藤]に逢ったので、資生堂で母上達と別れて、兄上と三人でロシヤに行きました。鴻の巣⁴⁴⁾にも。それから裏通の名も知らないカフェーにも。そして又ロシヤに行つて、自動車をたんのんで貰つて、小石川へ行つたのが、一時過ぎでした。丁度小山内先生⁴⁵⁾が帰られるところでした。兄上と熹朔とはじきにねます。岩村^[和雄]が来て居たので、それから又地下室で仕事をはじめます。まるで酔が出て来ます。夢よりもまだ覚束なく、何も解らずに仕事を続けます。椅子に腰かけたまゝ、うと―します。而して、いつの間にか外では蟬が鳴き出します。

六日

上に乗って冷たいものなど飲んで居ると、兄上と熹朔が起きて来ます。久敬⁴⁶⁾と岩村は寝てしまひます。そして三人は家へかへります。帰ると直ぐに寝ます。十時頃、高に起こされます。高も寝に来たのだと云ふので、又二人で寝てしまひます。昼飯で起こされます。午後まごろ―して居ます。夕方、高が帰ります。久々に酒を飲んだせいか、

頭はくらへします。体中の骨々が過度の疲労の後の様に、熱病の為の様に痛みます。而して齒も一日気持悪く浮いて居ます。

夕食後、三番町辺まで散歩に出ましたが、たまらなくて帰って来て直ぐに床につきま
す。少しの風もなく蒸々する土気が立ちこもって、油の様な汗が渲み出ます。茜の空が
美しく輝いても、円かな月が照らしても、今日一日地獄^{〔獄〕}の様な苦痛と不快から脱するこ
とが出来ません。今は亡い、懐かしいお父様。

七日

今はない、懐かしいお父様。朝のうち、きみ子さんときみ江さんの所へ手紙を書きま
した。朝は早く起きましたが、体も痛みません。小石川から電話でしたので、十一時半
頃早昼を食べて資生堂^{〔7〕}に出かけました。三階に行ってみると、昨日一日行かなか
たので、大分仕事は出来て居りました。小さな室は一面に表現派の三角でかこまれて、
所々にこれも極く不規則な四角な穴があいて居ます。ここに香水の各種の形の瓶をつか
って、それに一々電気も装置されて、十日から開かれる「光りと香の会」の会場が出来
るのです。^{〔土方与志〕}久敬は来て居ましたので、^{〔純三〕}今さんに^{〔紹介〕}照会されて早速仕事にかかります。水谷
仲吉^{〔48〕}、岩村、伊藤薫^{〔裁力〕}も、だんへにやって来ました。そして、十五六人の大工、土
絵具屋、織縫屋、電気屋にまじって仕事をします。或るものはアッピアの意気によって
縦の線の効果により、或るものはベラスゴー・テアタにより、或るものは香水自身の性
質によって支那の趣味をとり、ギリシャの連柱殿堂からヒントを得ます。そして其の他
には、全然表現派によったコンポジショナルなものが出来ます。

九十五度^{〔49〕}の小さな部屋に、二十人近くの人々が働きます。鋸の音がします。金槌が
鳴ります。板は抛げられます。それに不統一にのしり合ふ声。^{〔扇風機〕}旋風機は音ばかり立て
て、時たまま温い風を送ります。天井からは土絵具がぼたへ落ちます。そして、夜
になると、其小さな室に^{〔燭光〕}百色光の電燈が五つも六つともとされます。窓から見下すと、
漸く美しかった町には、散歩の人々が呑気さうに歩きます。飲む水も飲む水も其場で
汗になって、額から目から鼻から、体中からだらへと滴ります。斯うして十二時まで
仕事をして、僕だけは帰ることにします。青山行きの赤電車だけが一台残されて居ます。
三宅坂まで来ますと、五六台前の電車が故障を起した為に、やっと新宿行に乗り換へて
三丁目まで送り届けて貰ひます。夜は静かで、美しい月が明るく輝きます。家へ帰って、
冷たく冷えた麦水を飲んで風呂を浴びると、今日一日の汗の為に、気持がさっぱりしま
す。

八日

今は亡い、懐かしいお父様。朝のうち厚い^{〔雲〕}雲が蔽ひかぶさって、汗が内にこもって居
る様な気がしましたので、久々で素足で庭に下りて、掃いて水をうちました。其頃から

日が強く照りはじめて、風は涼しくなりました。風呂を浴びて出ましたら、広子⁵⁰⁾さんと文子⁵¹⁾さんが来ました。広子さん達は、これから至誠堂病院に多摩子⁵²⁾さんを見舞に行くと云ふので、私も一緒に十一時頃出かけました。

多摩子ちゃんは最う手術もすんで、すっかり元気になって居ました。床の上に床って〔座カ〕居ました。水道橋で広子さん達に別れて帰りました。いい風が通るので、一時間程うとーして居ました。夕方になると、又々厚い雲が出て、夕風が来ました。そしてそのまゝ、蒸々と暑い夜になりました。一寸五番町⁵³⁾の辺まで散歩しましたが、少しも涼しくはなれませんでした。

九日

今は亡い、懐かしいお父様。今もう十一日の夕方でごさひます。これから思ひ出しながら、簡単に書き綴ります。朝、歯医者から帰りますと、直ぐにひどく痛み出しまして、冷すやらもがくやら、昼頃まで大変な苦しみ方をしてしまひました。夕方から目黒の小城さんに遊びに行きました。小母サン⁵⁴⁾と子供達とは菊名⁵⁵⁾に行つて留守なので、保ちゃんと広子ちゃんと文子ちゃんと三人きりで呑気にして居ます。吉崎の虎雄さんが来て居ました。夕飯がすんだ頃、兄上が笹塚の帰りにやつて来ました。そして暫らくして、木島⁵⁶⁾サンが遊びに来ました。木島サンが帰り、虎雄サンが寝てからも、皆で歌を唱ったり、何かして遅くまで起きて居ました。夜中に風呂を浴びて、皆で散歩に出ました。檜の木立道をぬけて、一面の畑と遠くの森をながめ、再び木蔭に入り、三度芝生の平地に出ました。生垣と杉苗とが小高い丘の上に不思議なシリエットを画いて居ます。いもの葉が、葉裏を白緑にかへします。夜明前の空気は漸く冷えーとして来ます。十八夜程の月は、明るく高く澄んで居ます。

家に入ったのは、かれこれ三時半過ぎだったでせう。四時頃から私と保ちゃんとは、床につきました。〔欄外に記す〕而して、六時には私は起きて居ました。暑い暑い朝でした。若やかな浅緑の竹の林も、遠くの森木立のあざやかな黒緑も、まるで恐ろしいものを待つのか、或は苦痛に堪える為か、じっと一葉もゆるがせず、明るい重い沈黙を守り続けます。夕食の後、家にかへります。九時頃でしたでせう。

昨日から今日で、斎藤勇の「ブラウニングのサウル」を読みました。少し感想を書いて置き度いのですが、斎藤氏の訳と解説が、原詩を非常に妨げてる様に思はれますから(尤も斎藤氏の解説は、自分には是非必要ではあったのですが)、最少しよく読んでからにしませう。

十一日

今はない、懐かしいお父様。朝のうちに梅子叔母様⁵⁷⁾が、昌道をつれて出ていらっしやいました。高が昼寝をしに来ます。松岡氏が来ます。而して、夕方、直矢叔父様⁵⁸⁾が

帰って来られます。晩には、英子サンと田辺サンに行きます。

十二日

今は無い、懐かしいお父様。今日一日癪に障って癪に障って、仕方がありません。午後三時頃には、四囲は急に真暗になり、雨風が^{あまかぜ}櫛の葉を櫛の梢を揺りましたが、結局雨雲は逃げてしまひました。而して晩方になって、まばらな雨が降り出しました。母上と英子サンとは晩方鎌倉へ。

今日一日、何の倦怠、何の惰愴でせう。決して流れない汗、油の様に肌を圧する汗（濃厚な湿気を含む熱さからの）。痛みもせず、忘れもしないで、一日じね〜と直接私の頭を悩ます歯痛！それに一つの手紙！

十三日

今は無い、懐かしいお父様。今日は、終日唯一人家に残されて居ましたので、本当に落着いてよい気持ちでした。

午前中、多摩ちゃんを見舞に行きました。空は一日蒼く高く澄んで、明るい白い雲が輝き、絶間なく涼しい風が吹きました。自分でお風呂を焚きつけて置いて、中二階の縁側から T 字形の煙突から、もく〜と出る煙を永い間見て居ました。それは面白く、まるで生きて居る様に、止度もなく其処此処不規則に廻り吹く風のまに、心よげに踊ったり、飛散し、逃走し、急に気まぐれな心で逆行したり、はち合はせしたり、或時は忽ちに野蛮になって、齟齬み付き合ったり、そうかと思ふと、それは上手にキスしたり、たゆたったり急いだり、すねたり、まごついたり、見て居る間面白く変化します。而して、私はこんな処に可憐な世界があったことに気がつきます。一昨昨日、きみちゃんから手紙を貰ひました。「一方に人間の欲望が、一方に理想が、一方に肯定が、こんなものが一つ緒になってくる〜する」と。^{〔嗚呼〕}煙の国には欲望も理想も肯定も何一つありません。そこには、ほんの偶然——否、最も神秘なる必然が、そしてそれらの結果があるばかりです。羨しく思ひます。併し、煙の国は単一なる material の上に立ち、人間は幸にも又不幸にも psycho+physique なる二重の性格を持つことを、どうすることも出来ません。

十四日

今は亡い、懐かしいお父様。灰色の厚い雲が、圧へつける様にどんよりとして居ますが、何処かにギラ〜と強く日が照りつけて居るのを感じます。

寝不足に勞れた瞳に

^{さるすべり}
百日紅の紅

石楠花の紅
花魁草の紅
櫛の葉摺
それを縫ふ烏鳳蝶の輪舞

悪魔奴、もう沢山だ
夏の子を
夏の姿をかりて陥れやうとは
何と云ふ残忍だ

お前はあまりにも俺を知り過ぎて居る
あはれな俺よ
蠱惑の捕虜^{とりこ}よ
官能の犠牲よ

煙の中の世界
あの可憐な世界は夢だったのか
煙よ、可憐な煙よ
今こそ俺の手をとって
再び見知らぬ国へつれて行って呉れ！

×× ××

夕方でした。もう太陽もすっかり沈んで、あたりは灰暗い twilight の中に、それぞれの質をかくして、mass だけを気持よく感じさせます。そして、其頃からだん／＼に地は輝き出しました。

乾いた地は光るかと思はれる様に茜色に色づいて、灰暗い中に、不思議な明るさを与へます。あのゴーガンの絵に見る様な赤土の神秘を以て。空を見上げると、これは又、研きたてた赤金の様に明るく、又眩ゆく目を射ります。そして、処々その切目には闌な秋を思はせる、清澄な深い深い蒼穹がのぞいて居ます。その中に仰ぎ見る樹々は、暗緑の美しいシリユエットを浮かせて、一層に空を輝かしく思はせます。

母上はしらなかったと云ひます。ほんの十分間のこの美しさを、幾人の人が気付いたことでせう。その明るさに於ては、ダンテの天国に及ばなかったでせうが、その深みと慕はしさに於ては、少も劣るまいと思はれます。

×× ××

晩には所用で出科の処へ行きました。十一時頃、家にかへりつく頃から、久々で雨が

降り出して居ました。

十五日

今はない、懐かしいお父様。朝から雨が降って居ました。小さな春の様な雨です。昨夜から降ったり止んだりしたものと見えて、地面は大してじめ〱して居ません。そのうちに止んだかと思ふと、とてつもない豪驟雨が来ます。ほんの一分か二分で、二三回つづけざまに来ました。後はすっかり霽れて蒼空が高くのぞいて、白い雲が盛に飛びます。午後も一二回小さな驟雨が来しました。

多摩子ちゃんを見舞って、目黒へ行きました。十時頃帰りました。

午前中、雨が晴れると空があまり美しいので、お昼まで中二階の縁側に寝そべったまゝ、空を見つめて居ました。白い真白い群雲が、皆その頭を折からの強い日に輝かせて、北へ北へ飛びます。一段高い雲は縞形になって、ゆるやかに南へ南へ流れます。尚も高い雲は、掃の目の様に、又小波の様に深い深い蒼空にくっついてしまった様に動きません。そしてその無限に高い遠い蒼穹から、初秋の風が涼しい吹き下します。^(くか)

而して後も先きも忘れてしまひましたが、^(高山) 樗牛の句、「空行く雲の右と左を」と云ふ、只それだけが無性に懐かしく思ひ出します。静かに空を見つめた心が、懐しかったのでせう。而して、こんなことを考へます。此の緑の地は、まあ何と小さいことだらう。さっきの雲はもう何十里、何百里も飛んで了ったことだらうにと。此の緑の地は、あの空と而して雲の背景を持たなかったならば、何んなにか寂しいことだらう。そしてあの太陽、あの光の援助なくしては、此の地には何の輝きも、何の美も許されない。地とは何だ！小さな小さな一部分だ。而して私達は、此の小さな小さな地に縛られて居る！而して、あの遠い〱大きな雲に、蒼い空に、明らかに私はお父様の姿を見ます。而して私も何等かの方法で何等かの姿で、此の緑の地からぬけ出て、彼処に遊び度いと思ひます。私は熟々思ひます。私達はここで、何故かと問ふことを絶対に許されない。何故かと云ふ問は、私達人間同士の間にもみ通ずる。それも主観的にのみです。私達は私達を離れて、路端に数しれず転って居る礫の一つにも、否、葉末にたまった露の一滴にも、私達自身にすら客観的には、何故かを問ふ権利もなく、力もない。而して又必要ありません。何故なら、私達には只美しと感ずることを許されて居り、そして幸福です。私達に必要なのは、只感謝があるばかりです。

十六日

今はない、懐かしいお父様。今日は、直矢叔父様の、あの悲しい結婚⁵⁹⁾の日です。今日の午後に二人はまるで、はなれ〱の気持で、皆からは潤ひもなく、乾いた、「お目出度う」を云はれながら、三三九度の盃を取りかはしたことでせう。其の為に母上は、朝から鎌倉へ行かれて、又一日、只一人うちに残りました。お昼も晩も、一畳敷きの大

食卓に只一人、落着いた気持で座りました。今日も空は一日美しく輝きました。

悪魔のしぶとさと不遜とを以て
蛇の懷疑とさかしとを以て
私達が根を堀^{〔掘〕}り幹を絶たうとも
存在の神秘は破れまい
生命の神秘は碎かれまい

隣りの石屋は
石は何故割れるのか
鉄は何故石より固いか
人間は何故石を砕くことが出来るか
そんなことを知らうともしない
それで居て一日も彼等は
石を離れて生活しない

〔×を附す〕

十七日

今は亡い、懐かしいお父様。無意味な繰返しが、あまり永く私達を捕へると、何か超越的な感情を齎します。暑いのですこともしないで、毎日ねそべって居る。昼日中、先達から日毎私の耳について居た隣りの石屋の単調なゴツンゴツンが、何だか尊いものになって来ました。それは、念仏の神秘を以て、私の耳に何事かをささやいて居る様に思はれてなりません。少くとも、あの単調なゴツンゴツンは、不可思議な針を以て、私の心を譴責します。而して、やがて私は石工等の率直な汗を羨ましく思ひます。私が今読んで居る、「倫理学の根本問題」！それが石工等の汗と忍従とに対して、何れだけの価値があることでせう。少くとも、現今に於ける労苦と報酬とがあまりに並行を失って居ます。私は「倫理学の根本問題」に価値を絶対に認めて居ます。只、私達は石工等の忍従に耐え、石工等の汗の苦痛に堪えて、私達の路を歩まねばなりません。報酬が過大な為に、私達は価値をも間違ふ様なことがない様にし度いものです。是は彼等を此の上にも苦めると同時に、私達自身を軽侮するものです。

午後、直矢叔父様御夫婦して来られました。今日晩の汽車で、大湊に行かれるとのこと。夕方、佑サン⁶⁰⁾夫婦来られ、晩の汽車で信州へ。

十八日

今は亡い、懐かしいお父様。お腹をこわして一日ねころんで居ます。

十九日

今は亡い、懐かしいお父様。お腹は先づ直った様です。歯医者とは今日で、兎も角も、九月になって又行くことにして、一時方をつけて貰ひました。そして、三時四十分の汽車で、母上と鎌倉に來ました。歯医者であまり永い間引き止められて居ましたので、日数も追はれ、何処ともなく秋の様な風も吹き出して、鎌倉行の期待も、まるで薄らいでしまつて居たのですけれども、愈々鎌倉駅で下車すると、急に海辺に出た様な気がします。人々が皆、活気に満ちて居ます。殊に子供達は懐かしいものです。男の子達は、真黒な顔に元気のいい目を光らせ、女の子達は沢々しく頬を赤らめて、体中が輝いて居ます。白粉もぬらず、美しい素足を見せて、街中の子供達の様に、勢なくだらけて居るのは一人もありません。そして私も、もう海を波も埃の様な人々を見る様な様になります。暗い夜に美しい星が滴る様に輝きます。

而して、砂浜に快活に能動する、美しい青銅の群像を夢みて床に就きます。

二十日

今はない、懐かしいお父様。五時半に起きて、起きぬけに久顕さんを誘い出して、材木座の浜⁶¹⁾に出かけました。

緑の海は遠く遠く霞んで、厚い靄の後から射出する薄陽に、爽かに静かです。浜に出て居る人々も皆、朝の散歩の人達ばかりで、広い海にはここに一人あちらに一人位、白い手拭が浮いて居るばかりです。こぎ出した舟は碇を下して、冷たい水に浸り、快く労れて、八時半頃には家にかへります。

三時頃から二階堂の湯地⁶²⁾の処へ行きます。夕食をすませてから、丁度今日は大塔宮のお祭でしたので、二人でぶら／＼歩いて見ました。素人角力の周囲には、大勢の人がたかつて、おかしみた／＼で、角力がはづんで居ます。空には星がだん／＼に綺麗になってゆきます。

二十一日

今は亡い、懐かしいお父様。朝食前に又浜に行つて來ました。藤原（安場⁶³⁾）の処へ寄つて、一緒に由井ヶ浜⁶⁴⁾を散歩しました。

午後、又海に行きましたが、浴びませんでした。浜で不二磨⁶⁵⁾サンや捷ちゃん⁶⁶⁾や色々な人に逢ひました。晩には昌生叔父様⁶⁷⁾の処の方々が皆サンいらして、賑やかでした。

二十二日

今は亡い、懐かしいお父様。昨晚遅く音枝が來て居ましたので、朝食も食べずに音枝をつれて浜に出ました。一寸材木座で海に入りましたが、音枝が何でも江の島へ行かうと云ふので、（今日は昌生叔父様と釣に出る約束もありましたし、まだ飯も食べて居ませ

んし、昼中歩くのも随分大儀に思はれましたので、いやだと云ったのですが^{〔ママ〕}、海岸づたひに長谷⁶⁸⁾まで行って、電車で江の島まで出かけました。散々引張り廻はされて、午後二時過ぎに帰りました。昌生叔父様も浜をさがしあぐんで帰って来られ、久顕と再び出直たれたし、留守の間に、安場と湯地が訪ねて呉れたさうで、気の毒にも思ひ、残念にも思ひました。片瀬の停車場では、伊達十郎⁶⁹⁾に逢ひました。

江の島の栈橋から、又山の上の茶屋から、遠く烏帽子岩⁷⁰⁾の向ふに、茅ヶ崎の浜辺が見えます。そして何んなに貪り見つめたことせう。茅ヶ崎の色々な事などが、次から次へと、否皆が一緒になって、莫然と、只懐かしく悲しく思はれます。

鵜沼⁷¹⁾の入江になった浜伝ひに、烏帽子岩の向ふに、折からの午前の日に、明るく輝く様に、茅ヶ崎の浜が見えます。而して、私は箱庭よりも、まだ小さいこの茅ヶ崎の景色の中に、追憶の眼を以て固々の景色を見分けます。柳島から、手前の左の方に白い大きな建築物、南湖院です。そして其の前に、二筋三筋白く海気浴室を、ずっと右手には、東海岸の別荘地⁷²⁾（そこには私はよく遊びに行きました）。而して真中の加藤別荘の側の道を畑を歩き、松林をぬけて私の家につきます……

二十三日

今は亡い、懐かしいお父様。朝から湯地をたづね、くだらない話などして、昌生叔父様の処へ行き、夕食後まで遊んで居ました。午少し前から、空が一面に曇って、時々雨が過ぎました。而して、同じ様な半日が過ぎました。

二十四日

今は亡い、懐かしいお父様。昨夜の雨は、^{〔凶〕}狂暴な風を交へて、嵐になりました。縁側から見ると、海は土色に濁って、空に続ひて居ます。暴風雨は遠慮なく枝葉を折り、土を掘ります。海には白波が高々と打ち上げる様が、小さくへ、けれど壮快に見られます。

妙本寺⁷³⁾の森の中に、命の短い蟬等は、此の風雨の間も惜しげに歌ひ続けます。待つて居た嵐はどうへ来たのです。午後、雨も小止になりましたので、久顕さんと傘をさして、浜辺に出ました。浜辺に出た頃から、西の空が明るく霽れて来ました。海水小屋は、無残に骨ばかりになって居ます。なめり川⁷⁴⁾は三倍になって、真直ぐに海に打しながします。^{〔押カ〕}久顕さんと別れて、安場を尋ねて、又海辺に出ました。しばらく歩いて居るうちに、湯地に会ひました。帰って来ましたが、何だか物足りません。久顕さんと再び材木座の浜に出ます。空はすっかり霽れて、夕方の雲は千の色に彩られて、西の方は透き通る様なコバルトの空に、金の雲が爰き、向ふ材木座の方は、重い重い灰葡萄酒色の雲が幾重にも重って、静かな不動の中に蔭惨な感じを与へます。人がどんどん浜に向って走って行きます。

^{〔眼〕}馳けようか？

何んだらう？

^{〔駆〕}
馳けようか？

まあ、よさう。

^{〔駆〕}
馳けよう。

而して、もう二人は人々にまじって、どん――^{〔駆〕}馳けて居ました。海へ出ようとする処を、人だかりの中をどん――ぬって漁師達が、はんでん姿の死人をかつぎ来るのを見出しました。

死んでるのか？

もうだめだ。

樽だよ、樽だよ。樽をかたさうとしたんだよ。処が一本の電線が樽にからんで居るので、一方の手でそいつをほぐしたんだ。その間にもう一本のやつが足にからんだんだ。而してばったり波の中にたふれたんだ。

而して、人々は訳もなく、罵り合って居る。海はもううすやみの中につゝまれ、凄壮な怒涛の中に樽が一つこづきまはされて居ます。流された茶屋の側の電信柱から、二本の電線が長く垂れて漬かって居ます。小壺⁷⁵⁾の道を尚も行きます。砂浜はなみ――と被ひ尽されて、堤涯まで水をたたへて居ます。寄せる波と堆石垣に遮られて、返す波とは戦士の様に戦って、白々と玉砕して飛散します。そこにもここにも暴れ狂って、波は互に接衝し、奔流し、叫号します。

水平線は、美しく静かに、遠く天城山⁷⁶⁾を浮かべ、影絵の様な稲村ヶの凹凸の上に、燃える様なヴァーミリヨンの積雲がくっきりと動きません。

〔×を附す〕

二十五日

朝起きぬけに、飯も食はず、電車で藤沢に行き、茅ヶ崎へ行く。直ぐに父上の御墓詣をする。

今はない、懐かしいお父様。東海道の松並木、処々につづく松林には、子供達がくまでをもって、松の落葉をかきあつめて居ます。田は嵐も知らない様に、勢よく花稲を立てゝ、静かな日に煌めいて居ます。風もない一面の蒼穹には、透き入る様な純白の雲が縞となって流れます。大山⁷⁷⁾も富士山も、葡萄色にくっきりを浮き出して、処々に鼠色の綿雲を懸けて居ます。綺麗な――朝です。土井の処に行きます。誰れも来て居ません。安藤の処でも誰も居ません。西瓜畑に水がたまって、沢山の蜻蛉が飛んで居ます。子供達が尻までまくって、ぼちゃ――と、もち棒や網を持って追ひまはして居ます。浜に出ます。美しい砂山は少しも変りません。友田、大沢の連中も居ましたが、五郎サンだけが居ません。足立サンの連中も居ましたが、むかふでは知りません。茶屋の婆さんと娘達だけがおぼえて居て呉れます。

茅ヶ崎館⁷⁸⁾の西手の溝が、立派な川になって海に流れます。鎌倉の海から思ふと、それは淋しいものですが、私にはその一人一人が懐かしく思はれます。浜松の一本一本にも思出が残ります。お末さん⁷⁹⁾の所へ行きます。輝子⁸⁰⁾は相変らず悪いのですが、大変に元気さうに見えました。昼飯を御馳走になって、輝子にお土産として、一円つづんでやります。二時四十五分の汽車でかへります。停車場までくると、雨がどん／＼降り出しました。藤沢から電車の間、雨は益々強く降って来ます。鎌倉についた時、好い按ばいに雨が小止みになりました。車も見つからないので、馳^{〔馳〕}けて帰りました。そのうちに雨が再び降り出し、風も吹きはじめます。

二十六日

今は亡い、懐かしいお父様。朝から秋らしい雨が降って居ました。雨の小止になった処で、中沢さん⁸¹⁾に行きます。お午を御馳走になって、二時頃までごろ／＼して居ました。其間に時々ひどい雨が来ます。そして、雲が切れて雨が止みましたので、湯地^{〔孝〕}の処へ行きます。四時頃まで話して、安場^{〔保国〕}の所へ二人で行きます。浜では風が随分強く吹いて居ます。避暑客等も急に帰ってしまったらしく、海は急に淋しくなります。九時過まで遊んで帰ります。

二十七日

今は亡い、懐かしいお父様。昨日、中沢サンと約束して置きましたので、朝食後、久顕さんと昌道と一緒に（昌道は昨日から宿りに来ていました）、中沢さんの所へ行き、なめり川^{〔滑〕〔河〕}の川口に釣に出かけました。ちっとも釣れずに、お昼頃すっかり勞れて帰ります。午後、久顕さんは東京に帰ります。午後半に二階でうと／＼して居ました。昨日、安場の処で色々話が出たので、思ひ出した様に、長与^{〔善郎〕}さんと志賀^{〔直哉〕}さんの小説など引張り出して読んでも見ましたが、どれもここを三頁、そこを五頁位ひろって読んだばかり^{〔し脱カ〕}でした。

夕食後、散歩がてら八幡通⁸²⁾に出て、佐久間政一氏の「表現派の芸術」を買って来て、遅くまで読みました。

退屈な二十日の後に、鎌倉に来たことを喜びましたが、もう翌日から物足らなさが心の中に芽を出します。詩が書けないばかりか、現実まで裏切られるからです。夢は朝毎に覚めねばならないことを、ぼんやり考へます。

二十八日

今はない、懐かしいお父様。夜明前に、アンネがひどく吠えるので、目が覚めます。私の寝て居る二階のすぐ下で、それはしつこく啼き続けます。とう／＼終ひには、イネがわざ／＼外へ出て叱って居ます。然し、イネが家に上ると、すぐに又吠え出します。

而して永い間悩まされた後は、もう寝つくことも出来ません。うと——としたと思ふと、イネが下から五時半になったと告げます。直ぐに海に行く心算だったのですが、寝不足の為に、何だか材木座まで歩いて行く気がしないので、橋⁸³⁾の所から八幡通に出て、反対に八幡様の方に歩き出しました。町はまだ半分位しか起きて居ません。八幡様の池は静かに、まだ低い赤い朝陽を受けて、優しく後の松の森を映し出して居ます。

池を半分まではって昌生叔父様の処へ行ってみましたが、昨夜遅くまでお客様だったので、まだ皆さん寝てゐて、アサが一人寝むさうな顔して、女部屋^{〔中脱カ〕}に座って居ました。中沢さんの所に行くと、丁度御飯がはじまる処で、二人してチョココンと座って居ます。お茶をもらって、八時近くまで休んで帰ります。家の御飯は九時半でした。朝のうちに中野をつれて、道哉のお墓に行き、中野にすっかり草をとらせ、花と水を上げて、お詣りして来ました。而して、何か大変に気が^{〔済〕}ふんだ様な心持がしました。何故か、今度は茲に来て居乍ら、道哉のことを少しも思ひ浮ばなかったことをひどく責め度い気がします。昨日偶然トルストイの、「イワン・イリイチの死」の初めの方を開いて、こんなことを読みました。「此の懇意にした人の死と云ふ事は、斯う云ふことによくある一種の救はれた気持、即ち——死んだのはあの男で、おれじゃない——と云ふ気持を誰れ彼となく聞いた人々に引き起した——ね、さうじゃないか。あいつは死んだのだ。併しおれは此処に斯うしてちゃんと居るのだ——。」併し私は人々の死に逢ふ度にこう思ふのが常です。

「何と云ふ美しさだ。斯うして死んで行くのが自分だったら、どんなに心安いことだらう」と。而してこれには何の清教徒的な考や犠牲の感情が含まれて居ることがありません……。

午後、一寸浜まで散歩がてら行って来ました。環⁸⁴⁾サンと不二磨サンに逢ひましたが、別段話もなく、一寸挨拶ただけで別れました。何うも私の生活や思想が、あの人達から段々にはなれて行く事を感じないでは居られません。

夕食前に妙本寺の境内を散歩します。綺麗に掃き清められた庭に、大きな古い建物がしづかに立って居て、人一人いない夕方は、何と云へない静かな気持がします。御堂の後を行ったり来たりしながら、色々のことを考へます。——何故此んないい処が、しかもまじかにあるのに毎日来ないのだ、——。僧さんと云ふものは、なか——いいものに違ひない……。暗い古杉の森には、ざわ——と風が過ぎ、遠く近く、梟がかけあひで単調な啼声を立てます。梟と云ふやつは、何うも此の世ばなれのした懐かしい声を持って居る。而してとつぷりと日が暮れるまで、御堂の裏を行ったり来たりします。

二十九日

今はない、懐かしいお父様。五時半に起きて、八幡様まで散歩します。昌生叔父様の処で紅茶を吞んで、サンドイッチをつまんで、昌道をつれて、八時半頃帰ります。朝食後、

藤原（安場）の処へ行きます。昼食を御馳走になって（君子さんに^{〔紹介〕}照会されます。大変子供へした可愛い印象を受けます）。暫らくして海に行きます。そのうちに湯地がやって来て一緒に入ります。四時頃でしたか、上って風呂を浴びると、間もなく又渋沢と云ふ人が来ました（先達、湯地と遊びに行つて居た時も来て、其時^{〔紹介〕}照会された人です）。五時に湯地と安場の処を出て八幡の池で別れて、昌生叔父様の処へ行きます。夕食を（お約束によって）御馳走になって、帰ります。

三十日

今は亡い、懐かしいお父様。今日も五時半に起きて、直ぐ散歩に出ます。停車場の前から八幡通に並行する小道を行つて、八幡様に出、池の側の藤棚の下に腰かけて、静かな水面を永いこと見て居ました。今度新らしく改作された池は、何となく公園の様な感じがしますが、そのかはり、大変に小奇麗にすがへしくして居ます。人もまだ出て居ず、和やかな初秋の朝の日が静かに輝いて、池には蓮の浮葉の間をあめんぼ一が、一つ一つとゐります。昌生叔父様の所で、紅茶とバタとパンの朝食を食べて、九時頃帰ります。お昼まで、二階の縁側で、志賀さんの小説をぼつぼつ（直きに色々なことを考へ出したり、尚それを発展させたりして、暫らく小説をお留守にします）読みます。妙本寺のお午の鐘がボーンと長びいて幾つかあります。真昼の光に、すぐ目の前の屋根瓦はガラへ光りますが、遠く草色の海の向には、あさみどりの空がつづいて、天城山の上には晩夏の淡い浮雲が静かにかかつて居ます。

午後ぶらへ浜辺を歩きます。別に浴びるつもりもなかったのに、一つ長谷のはづれまで行つて見ようなど思つて居ると、海の方で裸ん坊の男と見なれない水着の女とが「東郷ハガネ」の真赤ないたごをふつて居ます。やつと気がついて見ると、中沢夫婦です。とうへ引張られて海に入ります。ぶるへふるえるまで入つて居ました。浜で藤原兄妹に会ひました。高辻⁸⁵⁾にも。

帰つて見るとひどく勞れて居ます。混沌とした頭で、夕食前暫らく妙本寺の境内を散歩します。何か少し位まとまったことでも考へ浮ぶかとも思つたのですが、そんなことを意識すればする程、とりとめもなく考へが飛びます。（昨日の午後、波多野の小父様⁸⁶⁾が尿毒症でなくなりました。）

二日程前から、漸く月の影が美しくなつて来ます。遠く海は銀色に一面輝いて、はっきりと松原の背に浮んで居ます。

今日は、志賀さんの十頁にも足りない短編物「清兵衛と瓢箪」など読んで、すっかり感心してしまひました。ほんの一枚半の、「母の死と足袋の記憶」も実に美しいものだと思ひました。而して今迄持つて居た小説そのものに対する変な嫌惡を忘れます。

三十一日

今はない、懐かしいお父様。今日は昨日の勞れで、少し寝ぼうしてしまひました。六時半頃から、一寸停車場の辺を散歩して来ます。

午後は、三時頃から浜へ出かけましたが、風が強く海がきたなかったので、入りません。帰り、一寸藤原の所まで行って見ます。二階の戸がすっかりしまつて居ます。「一緒に東京に行ったな」。一寸門のくゞりに手をかけたが、あかない。やっぱり一緒に行つて了つたのです、一緒に……。

ずっと中沢さんの所へ行きます。夕方、中沢さんとふみきりの向ふの方まで散歩します。夕食を御馳走になります。新高難破のはなしながら、災難の話ばかり出ます。而して、いやあな氣持がします。九時頃、月を浴びて、ぶら――帰ります。

〔九月〕

一日

今は亡い、懐かしいお父様。朝、散歩の時、八幡様で大きな亀ノコを見つけます。亀ノコは、乾いた土の上をノソノソと歩きます。而して自分は、「誰れかに捕まる」と思ひます。後も先もなく、「誰かに捕まる」と、只それだけ考へます。而して、亀ノコを奥の池まで持つて行つて、逃がしてやります。亀のこは、静かな朝にドブンと音を立てて水に落ちると、直ぐ又、一面の水苔の間から頭を擡げ、それから悠々と蓮の葉の蔭に潜つて行きます。少しの驚きもなく、侮りもなく、そこで私は呟きます。「亀のこは捕つた！だが、今古池の蓮の葉の下に居て、安らかだ」と。而して、それがまるで自然で、当然な様な氣がします。何故なら、亀のこは、余りに素直で人為がありません。

叔父様の処で紅茶を飲み、英子さんの処で、紅茶とパンとを食べて、八時半に帰ります。一日家に引込んで居ます。

夕方浜辺まで散歩に出ます。さすがに人出がぐんと減りました。波は大分小さくなりましたが、南頭にジャボ――と小波がゆれて、浜には藻屑が一面にうち上げられて居ます。処々で藻屑が焼かれ、黄色い白煙がもく――と風に飛びます。秋の夕の海は、静かに單調です。

晩は、今日は祖母上様⁸⁷⁾のお日なので、昌生叔父様の処の方々が皆して来られ、英子さんも夕食後來ます。

二日

今は亡い、懐かしいお父様。朝の散歩は、少し遅く起きたので止めます。十時頃、湯地の所^{〔孝〕}へ行きます。昼から湯地と安場の所^{〔保国〕}へ行きます。而して、舟を出します。四寸から、六、七寸の鰯とアジが釣れます。沖で海に入ります。今日は珍らしく北風で、海

は少しの波もなく、快いうねりが通ります。朝からひどく曇っていましたが、間もなく雨になり、それもちき止んで、湯地の所を出る頃には、太陽が照って居ました。夕方には又雲が多く、早々と暗くなりましたが、海は真青で水平線ははっきりして居ます。薄暗くなって、又々雨が降り出しましたので、舟をかへします。取って来たアジとジャ―で夕食を済ませた頃から、空がだん―に霽れて、遅く美しい月が出ました。平らかな芝生に三連のハンモック・チェアーに腰かけて、永いこと星を見ます。頭に上にノーザン・クロスがキラキラ光って居ます。

九時過ぎた頃から、三人で隣の管さんの所に行きます。管さんは、小石川の家を借りて居たことがあると云って、父上のことをよく知って居ました。十一時過ぎ、湯地と月を見て、ぶら―帰ります。まだ十一時と云ふに、町には人気もありません。

妙本寺の古杉の森蔭に、時をきって梟が二声づゝ鳴きます。祖父様は、朝出京されました。

日暮の沖から浜の燈火を見るのは、誠にいいものです。暮色と云ふ言葉が、しみりした感じを持って来ます。

三日

今は亡い、懐かしいお父様。一日、湯地と安場が来ると思って、心待ちに待っていましたが、二人とも来ませんでした。□□□□□□□

四日

今は亡い、懐かしいお父様。

朝の散歩の帰りに、昌生叔父様の所で、紅茶とパンの食事をします。九時半頃帰ってから、今日は夕方東京へ帰るつもりでしたので、名越の木下利玄⁸⁸⁾さんの所へ行ってみようと思って出かけました。秋の陽はまともに、随分強く照りますが、風はさすがに冷ややかです。名越に行ったら、木下さんの処はお客様でしたので、そのまゝぶら―帰って来ました。妙本寺の下で、安場に逢ひました。今少し前、私を訪ねて呉れた処でしたので、一所にかへり、午食を家で一緒に食べ、午後二時頃から安場と一緒に外へ出ました。妙本寺のお堂の所で腰かけて、話しなどして居ましたが（何処か、鎌倉の小さいながらも華やかな都会気分から離れて、山の方にも行く心算でした）、暑いので、そのまゝ電車で安場の処へ行きます。安場の所では、二人で寝転んで本を読みました。私は長与さんの（題を度忘れしましたが）、八月の新小説にのって居る一幕物^{〔談〕}を物みました。小さいものですが、今迄読んだ頼朝や山の宿、羽衣、明るい部屋、教師の家にて、などの、どれよりも面白味のあるものでした。

安場の処で風呂を浴びて、夕方帰りましたら、兄上が来て居られました。夕食後、兄上と昌生叔父様の処へ行って、ウィスキーを御馳走になりながら、大いに昌生叔父様と

芸術論をやります。遅く一時頃帰って来ますと、別に酔っても居なかったのですが、何だか胸が悪くなって、上げました。上げるといい気持ちになって、寝ました。風が強く、澄んだ空に美し月が、殆ど円くなりました。

五日

今はない、懐かしいお父様。相不変、朝は散歩します。午前中は、二階でごろ／＼して居ます。午後、兄上と八幡通をぶら／＼歩いて、梅子叔母様の所に行きます。夕方、浜に出ます。浜はもうぼつ／＼海水小屋も壊されて、すっかりさびれてしまひます。海浜院⁸⁹⁾の前のあたりに、ほんの二三人、水を浴びて居る人が居ます。浜風が強く、折からの西陽に、水気が埃の様に輝いて飛びます。兄上と砂の上に腰を下して、永いこと二人の西洋婦人の水浴して居るのを見て居ました。

雲一つない、まだ明るい空に、真白な美しい満月が上ります。この風の中に、大きな鳶が一羽、低く風に向ひ、羽を拡げ、巧みに身を操りながら、軽らかに一つ場所にじっと動きません。目は注意深く、波打際に下されます。

私達の身も髪も、べっとりとしとってしまひます。

それから安場の所を一寸訪ねます。

帰って夕食を食べた頃には、満月は益々亘え渡って来ます。凍てついた冬の夜の月の様に明るく、椎や桎の堅葉はざわ／＼と音立て、テラ／＼と白く輝きます。そこにも、ここにも、月の夜の不思議な影——、真暗なフラットな感じの、そして、何処か深く／＼心をひき入れる……。真暗な中に針の先の様な光をもった影があります。

立ち並ぶ葉鶏頭が、黒血の様なむかでの影を無気味に揺ります。^[築]月山の芝生に、遅くまで仰向に寝転んで露にうたれます。

床に就くと（電気を消して）——毎夜寢室の戸は全部開け放たれて居ます——、外が一層に明るく思はれます。丁度其時、夜まはりが、すぐ室の下まで来て、枳杖をチャリンチャリン鳴らせて帰って行きます。不思議に亘えて、いつまでも遠く聞えます。チャリンチャリン。

安らかな気持ちで直ぐ寝入ります。処が直ぐに、ひどく魘されて目がさめます。はじめ、傍らの机が音もなく静かに胸の上に倒れかかります。その机は、綿の様に軽いことをして居ます。それなのに、机は私の体にそのまゝつかへては居ないで、尚も静かに体の中にめり込んで来ます。そしてはじめて恐ろしい、気味悪い気持ちがします。而して、手でおしのけ様としますが、手は全くしびれて居ます。夢だなどと思ふて、急にやたらと跪いて見ますが、目も開かず、手も足もしびれて居ます。こいつは駄目だ、と思ってぐったり体をゆるめると目が開きます。（そこで、これは或種の自己催眠で、自分を苦しめるのだなどと思ひます）。

暫らく頭を擡げて見たり、手をさすって見たりして、「これでいい、と思ひます。そ

っと目をつぶって見ますと、駄目です。遠くの波の音が、一波毎に五丁も近いて、芝居の波の様な、妙に弾力のない円味のない、硬い音がします。瞬間一寸いい気持ちだと思ひますが、もうその一、一の音に、体がだん――に縮み上って、ぶる――とひどくふるえます。これはいけないと思って目を開きます（いつの間にか、とりこになって居るのです。やっぱり目は直ぐにはあきません）。三度目をつぶると、直ぐに又波がよせます。今度は、用心して、はじめの波ですぐ目を開いてしまひます。処が目を開いて居るのに、さっきと同じやつが同じ過程で私を攻めはじめました。（自己催眠は少し怪しいので、少なくともその又原因はなく、とも角チョコザイナ悪魔の奴にはちがひない）。こうした考の余祐^{〔裕〕}を持って居ながら、而してこう考へて居るうちに、体がふうわりと浮いて行きます。二尺か三尺上ったと思ふと、又ふうわりに少し傍^{〔とカ〕}の方にしづかに降りて行きます。ところが降りついた所は、軟らかい床の上ではなくて、硬い立体派の三角と四角の上でした。今度は体の方から（そのふうわりふうわりする体の方から）、それらの三角と四角の方にめり入^{〔込カ〕}んで行くのです。斯う壓されながらも、別に頭も痛まず、胸も悪くはなく、何方かと云へば、意識では不思議な病的ではありますが、快感に近いものを味ひます。

六日

今は亡い、懐かしいお父様。今日こそは帰らうと思って居りましたので、朝食後、ぶら――浜へ出かけます。海はきたなく、小さな波が不規則に後から――打ち上げて、浜には藻屑が散らばって居ます。僅かな漁師の外には出る人もなく、そこここに海水小屋が半分とり取り壊されたままになって居ます。寒い冬の海よりも、不思議な落莫を感じます。安場の所に行つて昼前まで話して居ましたが、物足りない気持ちで帰ってきました。天はよく晴れて、再び真夏の様な暑さです。午後三時頃、安場が松元をつれてやってきました。二人が帰ってから直ぐ、六時半の汽車で帰京します。隧道を一つ越えると、もう暗くなります。北の空に暗い中にパッパッと灰光が光り、奇怪な雲の影を見せます。汽車は明るい満月を浴びて、影と共にひた走ります。自分は「離れ行く」、「引かれ行く」寂しさを思ひながら、ちっと窓の外を眺めて居ます。急に明るくなり出して東京に入ります。東京に入つて余りに明るいのに、寂しくなります。何故なら、電車の中の人々は、ずる相な呂羽織の大番頭さん達がベコ――お互に頭をさげたり、顔で笑ったり、しかつめらしい腰弁さん達が汗を流して、背広の中に埋まって居ますから。

家の庭では、数十と云ふこほろぎが啼き競って居ます。その中に唯一匹松虫が可憐な声で歌って居ます（尤も松虫はひどくオーカアド awkward な鳴き方をして居ました）

〔×を附す〕

七日

今は亡い、懐かしいお父様。昼の暑さは、鎌倉で想像して居た様なものではありません。急に身がだるく、一日ねころんだり、雑誌に目を通したり、歌って見たりして過してしまひます。夕食後、笹塚に出かけて見ます。笹塚辺は一面にちんちろりんがないて居ます。提灯を下げて子供等が虫をつかまへたりして居ます。惣ちゃんは牛屋サンに行つて居ましたので、私も行つて見ました。十時過まで話して帰ります。美しい月が明るく川辺の薄を照らして、あたりは静かでした。森脇サンから【依頼された「家さがし」の事が】の「家の依頼」が気になったばかりに行つたのですが、肝心の君子サンには行つた時と帰る時におじぎをしたばかりで、何も話せません。帰る時には園ちゃん⁹⁰と君江サンとも、各小さい犬を抱いて送つて呉れます。

八日

今は亡い、懐かしいお父様。朝から雲が多く、蒸し〜して居ます。九時頃、江波を誘つて学校に行きます。学校はまだはじまつて居ません。

木山⁹¹の処に行き、午少し前に三越に行きます。七月に帰朝した、安宅安五郎氏の展覧会を見に。風景が多く、併しまあ外国らしい綺麗さを見せて居るだけでした。静物は更に気に入らませんでした。「ムードンの丘」と云ふ小さな風景が大変気に入りました。其他シャヴァンヌ、ボッチチェリ、レンブラン、ルドン等の大きな模写が目を引きます。

三越で騒々しく飯を食べて帰ると、涼しい雨が降り出します。雨嫌ひな自分にも、道に生々した気持を与へます。帰ると関口さんが遊びに来て居ました。皆で久々に花をひいて遊びます。関口さんは、夕食後兄上と銀座の方に出て行きます。

今日は久しぶりで、三度目にメリメのカルメンを読みました。そこには久遠の自由女カルメンシタが居ます。現実の自由が……

「私に命令することは出来ませんよ」

「気をお付けなさい。私にしちやならないといふ事は、何でも直ぐにされちまひますよ」

「あなたと一緒に死ぬのなら死にます。だけど一緒に暮すのは厭です」

「あなた私を殺す積りですね。解つて居ます。だけど私を従はせようたつて駄目ですよ」

「ホセさん、あなたの仰るのは、それは出来ない相談です。私はもうあなたを愛して居ないのに、あなたはまだ私を愛して居る。だから、あなたは私を殺さうって云ふのです。嘘をついてあなたを騙さうと思へば、わけのないことでした。だけど私そんな面倒はしたくないんです。私のロミとして、あなたはあなたのロミを殺す権利があります。けれど、カルメンはいつも自由の身で居るんです。カルメンはCalliとして生れたのですからCalliとして死ぬんです。」

而して、彼女はホセをして殺させた。彼女の以前のロムの小刀によって、二突で仆れ

ました。彼女は自由と Calli とが、彼女を離るようなことがあれば、何時何処でも死ぬのです。而して、狂暴な出鱈目が自分を捕へます。まったく出鱈目です。自由とはほんとに自由の人にのみ自由なのです。併しカルメンは遂に自由であり Calli であったのです。

九日

今は亡い、懐かしいお父様。朝から空は重たく曇って居ました。而して、いつもの様に頭は暗く閉ざされます。二日目の重い雲がのしかかって来ますから。百日紅と魁花草の花が潤れかかって醗く紅い為に。秋芽をふき出した黄楊の緑が櫛の花の強くむっと匂ふ頃をまともに思はせますから。

手紙を一本書いたら、午になってしまひました。午後から久顕さんと久々で神田をぶらついて見ました。買ひ度い本が沢山目につきますが、何れもこれも、手のとどかないものばかりです。森口多里氏の「美を味ふ心」を買って来ます。夜は暗く静かで、沢山のこほろぎが単調に啼きつゞけます。

十日

今はない、懐かしいお父様。今日一日又も空は曇って風もなく、死んだ様な日です。午後から久顕さんと中野の上原さんに行きます。その頃から日は蒸し――と照り出しましたが、何か厚い動かないものがその日を隔て、風は生温く、気はます――塞ぎます。夕方多摩ちゃんが退院すると云ふので、孝雄⁹²⁾さんと一緒に至誠病院にむかへに行きます。^(中沢)英子さんが出て来ました。

気まぐれに楽しげに、海から山に、町から野に吹きまはった野分よ。何処に行ったのか。お前が居ない為に、秋はあまりに静かだ。次ぐ日も次ぐ夜も、澄んだ蒼穹を見ず、降る星に逢はず、秋蟲等は漸く勞れて、嗄れた声を訴へて泣いて居る。日に隔てられ、厚い雲の下に動かない、無花果の広葉の蔭には、不吉な誘惑が、日毎に生長するではないか。朽木の根に、地の蟲等は、嘲弄の凱歌を上げて、呪詛を巢くふに忙がしい。そして、儂には今一つのものが必要だ。緑の空と元気のいい風、又は爆発する嵐、狂奔する情熱。何事であってもいい、思ふさま気まぐれな変転⁹³⁾。

〔×を附す〕

十一日

今は亡き、懐かしい父上の三年祭である。午後ささやかな、形ばかりのお祭りをする。母上と兄弟四人とその他には、お玉さん⁹⁴⁾と綾さんとだけが加はる。

朝から空は晴れ――して、秋らしい風がしづかに絶間なく吹いて居る。学校に出かけて、十三のまだほんの子供をモデルにたのんで来た。而して、元気よく家に帰ったが、

午後はまた、あまりよくなかった。何故なら、家では半日、あまりに騒々しかったから。自分はこの半日を前から静かに、しめやかなものとして心に画いて居たからである。今日こそ自分は、懐かしい父上と心からしんみりと話しができると思って居たのである。而も家では女三人よって、そわへと、かしましかったからである。自分は皆を避ける様にして居た。併しそんなことは全く駄目なことであり、自身に対する少しの慰めにもならなかった。

十二日

亡き父上に。自分は、今日から始める立像のポーズや仕事のことやを快活に考へながら、昨夜かって置いて、必要な材料などもって、学校に出かけた。然しモデルは約束の九時を過ぎてもやって来ず、永い間自分を待たせた。自分はやるせなく、モデル台から、塑造台、心棒をそろへ、釘や金槌まで買って来て、一人でいらへして居た。「こないんぢやないかな」。何故なら、あの子は今迄に一度も全裸体をやったことがないと云って居たし、昨日の口ぶりでは、今度も当然上半身のつもりで居たらしいから、自分は少しがっかりした様な気持で居たが、とうへやって来た。併し自分には怒ることも、どうすることも出来なかった。十時半も過ぎて、十三の女の子は、平気な顔をして（全く平気な顔してやって来るんだもの。自分は彼女に裸体でやって呉れるかどうか聞いて見た。彼女は相変らず、平気で顔を横に振って居た。自分は彼女に頼まねばならなかった。（而して幸にも、すぐとなりのモデル台には、彼女の仲のいい、よく知り合っているモデルが裸体になって居た）。而して結局彼女は自分から、明日から裸体でやろうと云ひ出して呉れた（尊大な女奴！自分は子供と云ふものを羨ましく思った）。明日は、新しいゴムの鞆を彼女の為に買って行ってやらねばならない。

今日から又、歯医者に通ふ。英子、鎌倉へ帰る。夕方、高が遊びに来る。夕食後、兄上と銀座に出る。冷えへする風が吹く。星は漸く輝きはじめる。有楽町の駐車場で嘉瑞さん⁹⁵⁾と管田サンに逢ふ。暫らく風はやんで、省線電車の中から遥か上野の方に、血の様な鈍く赤い、而して盥の様に大きな受月が昇るのを見る。

十三日

懐しき父上に。静かに美しい秋の朝です。降る様に立ちこめた霧の中に、前の左右田サンの尖った屋根は、全然その立体性を失って、灰白の空に鼠色に影の様に浮んで居ます。庭の木々は、そよとも揺がず、緑のマッスの中に、百日紅が点々と紅く、真直な横の若木は、葉先のエメラルドをしんみりと黒ませます。何処にともなく、何れ一つすぐれて近くもなく、そこら一体から細々と切間もなく虫の音が流れます。静かに平凡な秋の朝です。一重の夜着には冷えへと肌寒く感じます。

十三の女は早く来て呉れた。而して、約束通り、裸体となって呉れるので、今日一日色々

ポーズさせて、何枚かスケッチする。間で一度ポーズを変へて（明日からトンビ⁹⁶⁾に座った座像を拵へることにする）——多分立像に——今学期中、彼女を使ひ度いと思って居る。休の時間には、彼女は持って行ってやったゴム毯で愉快さうに遊んで居る。幸に彼女は直きに自分になじみさうである。

昼間中、日はじり／＼と照りつけ、夜に入るまで少しの風も吹かない。

十四日

亡き父上に。一日中あてどもなく考が乱れ迷ふので、自分は夏風邪にやられたことを知る。全く此の数日、自分は足の冷たくなるのを覚えて、毎朝夜明前に覚めるからである。而して、もう眠らないで毛布を引寄せ、頭からすっぽり被って足を縮める。白々と夜が白んで戸を開けると、あたりは一面の霧で、何処かに蟲が一二匹ないて居る。空気は冷たく、風は吹かない。やたらに樹々に張られた蜘蛛の巣は重たくたるんで、庭一面に伸びた雑草と共にべっとり湿って居る。而して、縁側の手摺に靠れて、夜着の胸をかきあはせながら、自分は日中の強い日と鼠色の雲を思ふのである。只霧が静かに白く流れて止まない。

可哀相に十三歳のモデルは、今日十一時に裸体でモデル台をふみはづして、真逆に床の上に落こちた。幸にほんの二所ばかりかすただけで、頭も何処も打つ様なことはなかった。それでも、瞬間横腹をおさへて、床の上に横座りになって居た時、彼女の顔は悲痛に歪んで居た。馳けよった自分は、自分の手が土まみれであるのに気付いたので、助け起こすことすら出来なかった。「怪我はないか、痛まないか」と聞いた時、彼女は一寸笑って見せて、「痛かないわ。只一寸息が止まったの」と云った。自分はそんな酷らしい答なんか聞かうとしやしないのだ。彼女が、わっと泣き伏して呉れることを望んで居たのだ。彼女は泣くかわりに、齒をくひしばって笑って呉れる術を知って居るのだ、いちらしくも。痛い時に泣き得る者は幸である。

午後、松岡氏と関口氏が遊びに来る。

[×を附す]

十五日

亡き父上に。日も暮れて、自分は奥の間に、暗い電燈の下で Brahms の My mother loves me not を歌って居た。息ばかり苦しくて、声は出ない。而して自分は、今日程此の歌の心に引かれたことがない。二度くりかへしてほんやり前を見やると、懐かしいものが目をとらへる。沢消硝子にうつった^[守宮]宮守の影である。可愛いく開いた二十の指が透いて見える。ぎごちなく動きまはるのをちっと目で追って行くと、小さな蛾の影の傍で止まる。身を縮めて充分の用意が出来ると、捷やく飛びかかる。而して、あやまたず、餌は確りと口に銜へられる。蛾は暫らく音も立てず、はた／＼と悶えて居るが、^[守宮]宮守は

容赦もなく呑みこんでしまふ。

生ひ茂った柿の葉が、僅かな風の過ぎる度に、硝子戸を無味悪く擦る音がする。愛する兄弟はあり、母はあるが、ふと自分は只一人この家に頼る人もなく住ふことを考へることがある。こんな気持で冬を迎へたら——（柿の葉がはらへと散るのは、もう間もないことである）落葉が乾枯びてかさへと風に舞ひ、真白に霜が降ったら——何んなに侘しいだらうと、こんな時思ふ。

自分は昼間街を歩いて、灰色の低い空が霞み、蒸々する日を受けて、郊外の静かに重苦しい秋を思った（秋の空の重いのは、春よりも悩ましい）。此の家の暗い空気には、^{〔守宮〕}宮守が応はしい。庭には草が生へ、庭木は茂ったまゝ、照り続く日に勢なく葉を垂れる。^{〔カマキリ〕}螳螂は家の中を飛びまはる。総べては凋落の兆である。こうした中には、優しい感傷の調があるものである。

自分は、皆が寝静まってから、蚊帳の中で源氏物語を開いて、夕顔と末摘花を読んで見る。自分の奥に眠って居る、暖かい情味がそろへと息を返す。それは立体派の三角の露骨な情熱ではない。飛行機、電車、自動車の^{〔欄外に記す〕}〔所有文明機器の〕燥急な雑音ではない。それは、柔らかい Refinement の羅を通して仄めく美しい夢の国、お話の世界である。五月雨の霽れるのを待って響き出る、しめやかな琴の音である……。

今日は、学校に湯地と小出⁹⁷⁾が訪ねて来て呉れる。

十六日

亡き父上に。電車はじりへする日の下を、九段の長い坂をぐづへと這ふ様に上って居た。堀端の土手の草いきれがして、電車の中は蒸々と暑い。上りきろうとすると、品川さんの銅像の大きな台石に、いつもの様に立ん坊か日雇人が三人程、汗みどろの破れたばろにくるまって、硬い石の上に寝て居る。容赦なく影は動いて、彼等の油ぎった日焼のした肌には、強い日が照りつけて居る。日雇人等の傍には、三尺もある白紙に、墨黒く「愚者の樂園」と読まれる。電車が少し行き過ぎると、それは活動写真の広告で、他の面には○○キネマと書かれてある。併しもうそんなことは何うでもかまはない。兎も角自分はこんな皮肉な場面は大嫌ひである。硬く焼けた石の上に、彼等はたわいもなく、全く静かに（電車の響の中に）眠って居るのである。自分は夜毎静かな蚊帳の中に、何度か覚めるのである。而して体はすっかり労れて居り、昼間は目の心が痛むのである。（毎日硬い土をねるのは決して楽なことではない。而して製作することは更に頭を苦しめることである）。それなのに、安らかな眠はそういつもは来て呉れない。それは二つの悩みが自分を追ひ廻すからである。人間性と生活との渦である。

十七日

亡き父上に。一日、日の影を見ず、冷たく曇って、冬の氷雨を思はせる様な日だっ

た。十一月が一夜に來たかと思ふ様に肌寒かった。こほろぎの聲が急にいみじく聞かれる。早く戸を閉めた後は、木枯しを聞く様に、乾いた風の音がする。朝のうち、久顯さんと神田に行く。ガイゼルに行つて本を見て居たら、エクスプレシヨニズムスの手頃な本がある。つく／＼見て居ると、店員が、昨日ついたばかりで、まだ店に出さないものだと云つて、大きな美しい写真の沢山入つて居る表現派の本と、ロシアの大部の月刊雑誌で、表現派の舞台やコスチュームのいい写真の入つて見るのを三冊程見せて呉れた。エクスプレシヨニズムスは、今迄見たうちでも珍らしい、善い写真が入つて見るので、随分欲しかった（勿論手の届かないことは解つて居るが）。久顯さんと二人で、小さい方のエクスプレシヨニズムスとゴルキーの「人格破壊」（独文）とを買つて歸つて來た。物足りないながらも、何だか嬉しい気がする。夕方関口さんが来る。文子さんが来る。セナさんが来る。はなれ／＼のお客さんで賑やかである。

冷え／＼とするので、蚊帳をつらない。何か放たれた様な広々した気持ちで寝る。併し眠は好くなかった。夜半に覺めて、耳の傍にプーンと羽で泣く声を聞いたのである。電氣をつけても何も見えない。併し確かに一匹の蚊が（秋の蚊は不思議に執念い）自分をねらつて居るのだ。まどろんでは覺めて、夜を明かす。

十八日

亡き父上に。学校の帰り、一寸二科⁹⁸⁾をのぞく。四、五人そろつて北村西望⁹⁹⁾先生のアトリエに行く。お客があつたので、先生には逢はず、アトリエで今度の先生の帝展製作を見る。牛の様な犀の様な、それは人間ではあるが、善良な動物である。而して、善良な彼は、実は絶大なる力の権化なのである。去年の「漁師」と同じ行き方の幾分変化に富んだ面白い作である。

それから皆で、建畠大夢¹⁰⁰⁾先生のアトリエに行く。先生は留守で、奥さんが赤ちゃんをつれて應對される。

晩には文子さんと保さんが来る。遅くまで遊んで行く。

× ×

これは此の夏、志賀さんの「母の死と足袋の記憶」を読んで感じたことである。人はその一生の間、何等かの方法で何等かに「甘へたれること」を要求して居る。赤ん坊は親に、若者は彼等の恋人に、——憧憬に。

而して、老人は彼等の運命に。自分は小さい時から、仲の子として先づ親に「甘へたれること」を拒まれた。それは、仲の子故であるとは限らない。併し親は自分をおだて、自分に虚偽と虚栄とを教へることによって、自分に「甘へたれること」を拒んだのであつた。兄と弟とは「甘へたれること」によって母を喜ばし、自分は「甘へたれないこと」によって、母を喜ばして居たのである。兄と弟とは、人間の自然の姿によって母を喜ばし、自分は又不自然な道によって母を喜ばしたのであつた。而して不自然な畠

に培はれた自分は、「恋を恋ふる」時代が来ると共に覚めねばならなかった。新らしく生れた「甘へったれる心」を以て過去を顧みたのである。そして、永くも欺かれて来た過去に、虚偽と虚栄とをまぎへと感じなければならなかった。而して、自分が其頃から、母に背かねばならなかったことは、当然なことである。人に対して挑みかけねばならなかったことは、極めて必然なことである。而してこの力は、自分が母の失望を見捨てにするに充分だった（こんな時、理性は何の力もないものである）。而して、自分は永い間不自然故に孝行者であった償として、今極めて自然な不孝者となったことを悲しみながら、何うすることも出来ない。恐らく自分に「甘へったれる心」が解せられる時、自分は極めて自然な孝行者となることが出来るかも知れない。

自分は母の淋しい諦めと慰めとの為に、暫らく狂人扱ひにされることを耐え忍ばなければならぬ。自分は今迄、海は青いと教へられた為に青いと思ったので、青いと感じた為に青いと知ったのではなかった。而して、恐らく赤いものをさへも青いと教へられた為に、青いと思ったのだから。

十九日

亡き父上に。学校に松元¹⁰¹⁾が訪ねて来る。松坂屋で午餐して、一緒に家に帰る。夕方まで遊んで帰る。

朝から暗く曇って居たが、日中は淀む様な鈍い陽が射して、蒸々と暑い。夕方から煙る様に雨が降り出した。

二十日

亡き父上に。一日冷たい雨が降ったり止んだりした。晩は田辺さんが見えた。

二十一日

懐かしき父上に。朝は何うしたものかひどく寝坊をした。もう八時にもなって居たのに、外は薄暗く、サワへ―サワへ―と木の葉が絶間なく鳴って居る。コーヒーとパンと卵を食べて、少し遅く学校へ行つた。雨にもならず、薄陽はさしたが一日冷く、から風が木の葉を散らした。

学校から帰り、江波と木山が一緒に遊びに来た。中二階に居たら、^{〔世〕}救生軍の女が二人やって来た。兄上が出て行ったら、何か寄附をして呉れとの事で、兄上が若干やった所、二階に書生さん達がお見えの様だから、あの方々にも寄附をお願いして呉れとの事で、兄上が何か主意書^{〔趣〕}の様なものをもって来られた。勿論誰も金などありはしない。兄上が玄関に行かれた頃、江波が、「お兄さん、画ならありますよ」とどなった。直ぐ兄が、絵でもいいから呉れて云ふて居ると云つて来られた。予期にはずれて、一寸当惑した。勿論絵を呉れとは云ふまいし、また少しもやることなど真面目で考へて居やしなかった

から。併しもうやらない訳には行かない。自分は丁度、夏に画いた八号の風景があったので、あれでもやって下さい、と云って指した。併兄上が、「なに、写真版でいいんだらう」と気付けて呉れたので、早速救生軍に^{〔世〕}応ふ様な宗教画の写真版（一つはルネッサンスのラファエルのマドンナ。一つは何かもう少し新らしいもので、一人の婦人がヨハネの首を大事さうに抱いて、天に向って何か求める様な、訴へるような——併し実は、もっと——蠱惑的な目を仰いで居る。その傍には、ヨハネの首のない身が仆れて居り、上の方には天使達が列をなして、遠く続いて居る絵）を出してやった。兄が帰って来て、何か肉筆のものを云ってたと云はれる。併し、自分の所には、商売柄、人体のスケッチが^{〔山脱カ〕}沢あるばかりである。而して、返事も待たずに救生軍の女達は、庭先から挨拶して帰って行った。二人で一枚づつもって居るのが何だかおかしかった。兄が、「絵ならあるさうですが、絵なんかでは仕方がないでせう」と云った時、一人の女は即座に、「いいえ、私が頂くのです」と云ったさうである。なか^{〔世〕}——救生軍の女さんも近頃気が軽い。後で聞いたら、あの二人は昨日も来たので、「お庭先でよろしうございますから、お弁当をつかはして下さい」と云って、縁側でお弁当を食べて行ったさうである。

夜は益々風が強く、^{〔っ脱カ〕}空気はすっかり乾燥して、鼻の奥がスカスカする。

二十二日

亡き父上に。静かな朝が明けて、静かな日が過ぎて、冷やかな夜が続く。

秋が漸く色濃く、高い桐の葉が蟲ばんでカサカサと硬く、最後の百日紅の花に、はじめの赤蜻蛉が飛ぶ。

学校では、昨日あたりから、女の子が妙に沈んで、寒いのか、気持ちが悪いのか、いやなのか、聞いても只静かに頭を横にふる。休の時間に黙って並んで座って居ると、女の子は、急に、「私淋しいの」と一人言の様に云ふ。

自分は、休の時間は、外へ出るなり、仲間のもつと遊ぶなり、何でも好きなことをする様に、又手毬なり綾取りなりして遊ぼうと誘って見たが、女の子は、黙って下を俯く。「そんな淋しさではないのか」と、そんなことを自分は、十三の女にきいて見た。勿論それに答へようとは思はないし、答へは要りもしないのであるが、彼女等の境遇の者等は、その感傷心に触れ動かしてやることによって、幾らかでも慰められることを知って居るからである。

^{〔柴山矢八〕}
夕方、祖父上出京。

二十三日

亡き父上に。粉の様な秋雨が、一日降ったり止んだりする。空は小暗く、少しの風もない。今日一日「音」が死んでしまった様な気がする。晩は江波の所に呼ばれて行ったが、木山も三沢もとう——やって来なかった。江波が多治見で焼いて来た皿を一枚貰って帰

る。十二時前である。

二十四日

懐しき父上に。美しい朝が明ける。明るく冷たい風が、流れる如に吹いて、湿った地からは、一面に仲秋の気が立ち昇って、虫食んで醜くなった山桐の高い梢がゆるやかに揺れる。遠くで油蟬が力なく鳴き、紫蘇の葉の黒づんだ葡萄色の中に、白蟻が飛ぶ。小春が近い。

午後三時半頃から、久顕さんと戸山ヶ原¹⁰²⁾に行く。此の日曜日を最も有能に過さうとする人々が、沢山にそこらを歩いて居る。新婚らしい夫婦者、運動姿の若者、バスケットをさげた女学生達、さざめく者、黙って一人歩く詩人さん、射的場の土手に攀ち昇る男女の子供さん達……。どれも、これも、皆色々な形で喜ばしさうである。原は一面に草が深く、柵林に美しい夕陽が快い。影と光を揺らめかせる大空には白雲、一面に浮いて居るが、空気は澄んで、からっとして居る。

木蔭に只一人、興味深い物語に読み耽ける。又自ら惚れへする様に、小声に讃美歌を誦む女。立木の間を蔭から光へつつましく語らひながら行く散策者。青草の上を土手を馳せ上り駈け下り、笑ひ罵る小供達。大空の下に大あぐらかいて、何々快談する若者。それらが何者にも妨げられず、思ひきって柔らかく傾く太陽。心の奥までも透る夕風に、緑と緑と光と土との諧調、仰ぎ見る清澄な大空と共に、自分の心を近頃稀に軽くする。

二十五日

懐しき父上に。十三の女は、早く学校に来て居た。併し、自分が行くと直きに、「今日、私帰るの。九時までに帰るのよ」と云った。自分はすぐ、彼女の母が悪いのだと思った。彼女はよく、「私のお母さんは、病気の問屋よ」と云って、指を折りながら、幾つかの病気の名を挙げるのを聞いて居たからである。而して彼女は帰って行ってしまった。其後で隣のモデルから、小さい女が、彼女の実の父と実の母に、如何に酷らしく扱はれて居るか（而して小さな商売をもった父と、病身に骨と皮ばかりの母とは、実は彼女なしには一日も生活することは出来ないのである）、而して、働かされて居るかを聞かされた。隣のモデルが、彼女と知り合ひになってから間もなく、子供はつらいと云って、一枚の着物と一本の兵児帯とを持って家を出て、彼女の所に頼って来たことがあり、彼女が気づかって家まで送ってやって、不幸な子の為に、不幸な父と母を諭し頼んだことがあることまで聞かされた。子供が三日前に、「私淋しいの」と云った時から、自分はこの事を知って居た様な気がして居た。子供の前に横はる暗い闇を思ふと恐ろしい。其上尚悪いことに、子供は可愛くて綺麗である。

〔×を附す〕

仕事がなかったので、二科会の展覧会¹⁰³⁾を見に行く。

歯医者では今日で先づ方がつく。何か許された様な気がする。晩には、澤本氏と白浜氏と最一人知らない人が尋ねて来て、遅くまで居た。

十二時前に床についたが、今日一日蒸暑かった為か、急に又蚊が出て、寝つかれない。而して一時近く、電話がかかって、澤本の連中が皆で帰って来て、宿るからと云って来た。
夜中に蚊帖^{〔帳〕}を出して吊る。

二十六日

亡き父上に。昨夜は随分遅くなったが別に寝坊もしなかった。綺麗な朝が、だんへに風をうしなひ紫の霞を下し、秋日の下に、蒸々と暑くなって来る。十一時頃、皆でぶらっと出てぶらっと学校に行く。学校で皆に別れて美学を聞く。但し、美学ではなくて、高倉氏のデッサンを見ただけである。

昨日の二科会の印象をぼつぼつ辿って見る。先づ一室から行く。椎塚氏^{〔猪知雄〕}が相も変わらず悪い趣味の馬鹿でかいものを出して居る。これは一目見て、人を不愉快にする絵だ。それから、虫明柏太氏の「真夏の光」が強烈な色彩を放つ、強い色ばかりの割合に、銜った様な不快を感じさせない。随分うまいと思ふ。但し、肝心の近景、木の根本からこっちの、岩の様な土の様な処が全体からはなれて、妙に神経質に複雑^{〔複〕}して居る。此処は、このままでは何うしても自分にはいやである。次に今度馬鹿に評判の高い横井弘三氏の「郊外のおモチャ屋」がある。何と現代的(?)な絵だらう。すっかり子供になりきった横井氏は(人間的に又は視覚的に)、画家としてまで子供になってしまったことを、何う考へたものか!^{〔欄外に記す〕}[(子供にかへれとの意は、子供のように上手になれと云ふことである。子供のように下手になれと云ふ意味ではない。純情に殉ぜよと云ふのである。自己を偽はって純情を真似よと云ふことではない。)]氏の絵(大きな絵)には、一面に頗る興味深い物等が、頗る興味深く並べられて居る。ぶっきら坊な日廻草が、大きな頭をあっちこっちにうなだれ、うすべりの上には町っ子の一郡^{〔群〕}が、思ひへんの形をして居り、店にはぎっしり赤いおもちゃが並び、立派な屋根の向ふには、店から飛び出して行った様な飛行機が飛んで居る。而して皮肉をぬきにして、氏の絵はあまりにおモチャ屋の感じになってしまったのである。肖像画に至っては、更に失敗して居ると云へるだらう。あの不思議なタッチと不思議なバックとは、御本尊のより内的な何者かを暗示し、補佐するのでなければ、大した意義がなさうである。小島善太郎氏の二点は、あまりに色其物が無雑作に取扱はれて居る様に思はれるが、調子も面白く、感じもいい。二室に行って、田中冬心氏の「懶画房」は、硝子戸の硝子のコバルトが闖入者の様に、部屋の中を不安にする。当の御主人のあの気持のよささうな懶な顔は、あんなコバルトを要求して居ない。木下義謙氏の「妹の肖像」は、全く期待にはづれたことを告白しなければならない。テクニックスが勝って来ると、放縦になるか、覇気を失ふかである。木下氏の肖像は、

昨秋の「兄の肖像」を見た目には、いかにも覇気のないものである。春の平博¹⁰⁴⁾の「祖母の肖像」も又、同じ様にチンチクリンにまとまったものであった。バックの古画などいないから、美しい瞳が欲しいものである。

小穴隆一氏の「花」は、四室の永瀬義郎氏の「花」と共に、羨ましい余祐^{〔裕〕}から生れた瀟洒であるが、自分は寧ろ後者のを選ぶものである。三室で幅をきかせて居るザッキン^{〔諸〕}氏の緒作は、どれもこれも選りに選った様な不愉快な色と、不愉快な線と、不愉快な形とで出来た、不愉快な絵である。

二十七日

亡き父上に。雨が降るともなく、一日曇って蔭気だった。学校のかへり、江波、三沢と銀座に行く。ロシアで四時頃まで飲んでぶら〜歩き、警醒社¹⁰⁵⁾で「希臘思想の研究」を買って、パーラーに行き、お茶とお菓子を食べて、三人で堀端を歩いて家に帰る。江波、三沢は、晩九時半頃に帰って行く。関口、松岡氏が来、十時半頃まで喋って行く。

二科の印象を続ける。四室は、常連揃ひである。二科賞の林武氏も例の如く、児島善三郎氏の諸作皆つまらなく、クレメーニュの奇怪なもの。只、小出橋重氏が、一寸新面目を見せて居るが、横井氏の思ひきった諸作から見ると、まだ〜最初の過度期^{〔渡〕}を思はせる。横井氏の諸作は、どれも或る面白味を持って居るが、今迄の氏のものにあまり見ないナマな黄色が一つ二つ、ひどく目を妨げるあの黄色は、何かに変るべきではあるまいか。

五室に入って道にしっかりして来るが、どれもこれも無難の域を遠く越えない。中川紀元氏は、見るかげもなく下手になった。去年の諸作には、確かにローカル・カラー以上のものがあつた様に思はれるが、氏は確に早く大家になり過ぎた（これは一体中川氏ばかりではない。芸術家自身と共に世間にもせめがある）。ジェレニェウスキー氏の絵は大分見慣れて来たが、いやみがない。とんで七室の会員室では、安井^{〔曾太郎〕}氏の一点と山下^{〔新太郎〕}氏、津田^{〔青楓〕}氏の諸作をとる。田^{〔津〕}清^{〔青〕}楓^{〔楓〕}の懶。青楓が昨年あたりから、なか〜懶どころでなく、勉強して居る。小さな「赤いばら」あたりに一寸真似の出来ないよさを見せて居る。山下新太郎氏の世界が、静かにおっとりおちついて居るのは羨ましい気がする。併し自分は「柿」と「海棠」をとる。「石橋」及「秋色」は、まとまり過ぎて、箱庭になってしまつて居る。変人熊谷守一氏のいたづら書の二つの小画は、人間ばなれて居るが、人の心を引くものである。

八室の未来派では、横山氏の静物の一つと吉田謙吉氏のものが面白い。吉頓^{〔郷〕}二郎氏の二作も感じのいいものである。沐浴の方がいい。

変つたものばかりを書き立ててしまった。是等の外に、静かな心を真執に生かしたものに、なか〜好きなものがあつた。が其等は皆がごっちゃになって、誰の何だったかははっきりしない（是れは自分の罪である）。作家に対してすまない気がする。もっと

―自分は是等の絵をも静かに味はなければならなかった筈である。こんな自分が居る為に、所謂展覧会絵が出来ては申訳ないことである。(二科は奇を好み、帝展は努力を見上げ過ぎる。真面目な充実した完全な同人展覧会が生れなければならない。)

二十八日

亡き父上に。雨も降らず、風も荒れないが、天気は決して順調ではない。学校のかへり、院展¹⁰⁶⁾を見る。晩は帝劇にパヴロフを見に行く。後藤^{〔兼後〕}、野崎^{〔泰彦〕}、松元^{〔方房〕}、甘露寺、其他に逢ふ。秋は漸く深くなるのに、自分にはあの快い憂愁は訪れない。今自分は、日毎にいらだたしい愴荒に沈む気がする。長い間一つの詩も書かない。憧れて―見たパヴロフの delicacy 其物、又 pomposity 其物に、今の自分には望ましいものでありながら、其処に或る隔りを感じないでは居られない。其の意味で、ミス・フェリードの Auitras dance は親しみ深いものだった。こんな気持の時、The Fairy Doll の様な、Comic なのが(随分散漫なものではあったが)人の心を引く、――全然客体と主体との意識から離れて浸り切ることはないが。それ等には、偽瞞^{〔欺〕}の為の偽瞞^{〔欺〕}がなく、偽瞞^{〔欺〕}は偽瞞^{〔欺〕}として露骨に無邪気にほっぱり出され、皮肉は遠く超越されて居るからである。Solo は道に美しいものである。パヴロフの古典的な白鳥の様な狐の様な顔には、楽面の不思議な魅惑がある。

二十九日

懐しき父上に。落着かない風がざわ―と吹き廻って寒かった。雨ともならず、午後には吹き放たれて秋の青空が美しく輝いたが、日暮には再び雲が一面に下りて、不安な気が黄ばんだ樹々の葉を鳴らす。夕方祖父様出京。

(朝明るいので五時過ぎに起きた。東の空は焰の様に紅く、湿った緒土も屋根も露も静かに輝いた。而して、そのうちに紅い日の中に、大粒の紅い雨がばら―と降ちて来る。^{〔ママ〕}間もなく雨が止んだ頃から、冷たい風は吹き吹きはじめた)。

三十日

懐しき父上に。朝から明るく静かだった。樹々の葉は美しい日に白く光り、空には雲もなく、高く高く澄んで居た。学校の帰り、倉沢¹⁰⁷⁾をひっぱって来た。夕食後、二人で江波¹⁰⁸⁾の処へ行く。江波の処には、中島が出て来て居たし、三角¹⁰⁹⁾、清公も来て居たし、三沢^{〔豊四郎〕}、木山も後からやって来た。江波の妹や弟達も交って賑やかに十二時近くまでも遊んで帰った(祖父様帰鎌)。

静かに満足りた心に、いつか不法な欲求が芽ぐみ、寂しみと悩みとが深夜を尚も暗いものにする。怪しげな玻璃の高楼と、不快な幻の獣供の不安が眠を遠く追ひやる。不屈な眠が攻め立て攻め立て、漸く自分を救ひ出した時、其の「眠の時」は、力なくうなだ

れて、東の方から薔薇色の日が、勝ちほこって輝く。

野間¹¹⁰⁾から葉書が来た。「今度止むを得ず退学しました……。これから丈夫になったら、コツコツやります……。諸君にもよろしくお願ひ申します」と。九月になったら、九月になったらと、待ちに待った九月に、野間は又又背かれたのだ。五月には、仏国美術展のロダンのシャヴンヌを買って、来ルべき九月を夢みて居た野間。ヂンバリストを聴いた日から、パヴロフを憧れ待った野間……。色々の意味で九月を専ら期待して居た野間——。それが、その九月が酷くも野間に背いた^[ママ]たのだ。どんなに寂しいことだらう。苛々して日毎に運命を恨めしくにらみながら、引摺られて行く野間は、実に不見にも気の毒である。そして、運命に拘ることも出来ないで、「丈夫になったら!」と思つて居る野間を思ふと堪らない。自分は野間の分まで引負つて勉強しなければすまないやうな気がする。運命よ、若しもお前にも目があったら、選りに選つて野間に対してこんなにも酷い仕草が平気で出来ようか。野間が「丈夫になる日」を、自分も共に専心待つものである。

十月

一日

自分は今ひどく勞れて居る。このままじつと仰向に寝そべつて居れば、三日でも一週間でも、まじへしながら、ちつとして居る様な気がする。

兄上も弟も、此の日曜日を誘はれる様に、ぶらへ出て行つてしまふ。自分は日がな一日、中二階の一室に寝そべつて、色々のことを考へたり止めたりする。旦の静かな美しい日が、いつか一面の灰色雲に被はれて、暗くへなつて行く。生麦にも是非一度行かなければならない。笹塚にも行つて置き度い。誰れ彼れに手紙も書き度い。そんなことを思ひながら、室の中にただ仰向けに寝ころんで居るのだ。読まねばならない本の事も考へる。

昨日から、直したばかりの歯が執念く痛む。紙屑でも埃でもちらかつた室の中ちう、思ふ様のたうちまはつたら、大空の下を仆れるまでも狂の様に馳け出したら氣持よくなるだらう、などと思つてちつとくすぶつた天井を見つめて居る。而して何もしないで夜が来ると、寂しい気がする。自分は勞れて居る。併し今晚ぐらひ嵐がやってくるだらう!

二日

亡き父上に。夜明前に大分雨が降つたらしい。紫の霧の濃い中に、赤らんだ日が射し透して、木のうれへに美しい夢の玉が光る。地は黒く湿つて、青苔が活々と蘇甦の喜びに色めく。霧が晴れ、蒼穹に白雲が飛んで、日は蒸々と暑く、白い埃が舞ひ上り舞ひ上る。

午後とうへ、又又歯医者に行く。晩には江波兄弟、三角、中島がどやへとやつて

来て、遅くまで遊んで行く。夜十二時前になって、気まぐれな月の夜から雨が降り出し、すぐに止んだが、暫らくして本降りになる。

三日

一日じと――と雨が降り続ける。

四日

霧雨が煙って居たが、昼頃〔か脱力〕止む。併し空は重たく曇ったまゝ、早く日が暮れる。学校は記念日で休みだったので、生麦の野間の家を訪ねる。野間は力なさうに寝て居た。

五日

学校のかへり、三波の処へ行く。帰ったら室には小林さんの弟が来て居た。奥では高が布団を敷いて寝て居た。母上は鎌倉に行かれた。

今日は十五夜である。幽かな、白い波雲が一面に空を被ては居るけれど、円かな月はつゝましく照り出て、夜は明るい。湿った土も樹々の葉も庭石も、薄白く光って居る。風もない。兄は木島さんに行って帰らない。弟は奥の間に〔ママ〕寝た。

〔2 頁白紙〕

〔「蓮の露」他、本からの抜粋等 3 頁省略〕

あの事があってから、自分は日毎に朝目が覚めると、又本を読んで居ると、ふと「ツネサンの事を思ひあたる。而していつもツネサンを思ふと、魯鈍な悲しいグロテスクが頭の中に描かれて居る。

自分がまだ七ツ八の頃、よく渋谷の叔父さん¹¹¹⁾の処へ遊びに行つて、ツネさんと裏の畑で焚火をしては、其の側でネッキ¹¹²⁾をした事を覚えて居る。ツネさんは、其頃もう二十才前後の青年で、叔父のうちに厄介になって居たのである。小さな自分達は、今考へて見ても、当時何んな理由があつたか、或は別段の理由もなく、ツネサンをくみし易いと思つて居る。ツネサンも又、他の年上の人達の様ではなく、蔭にまはつて、或はまともにからかはれても、悪さをされても少しも怒つたり、いやな顔もせず、よく小さい自分達と遊んで呉れる。

而して、小さな自分達も皆が云ふ様に、只ツネサン――と、此の年上の友を呼び慣れてしまふ。併しこうしたことも永くは続かなかつた。而して、ツネサンは、何時の頃からか又何うしてか、叔父さんの処から消えてしまった。そしてそれからもうツネサンの噂を聞く事も、まるでなくなつてしまった。併し人並に届かない小さな体軀と、髪の毛の薄い大きなきんちゃく頭と、鼻しわから口元にかけての、何か猥らがましい表情と、

半ば侮蔑を含んだ併し親しく呼び慣れた「ツネサン」とは、かなり強い印象を自分達の頭に残した。其後自分は何処かで通りすがりに二三度ツネサンを見たと思った。そして、もう何時か十四五年の月日が過ぎて、自分達は大人になって了ふ。

〔本からの抜粋等，5頁省略〕

さらへと
風は泣くなり
さらへと
枝はうつなり

はらへと
葉は降り敷きぬ
はらへと
何の露ども
この涙ども

わぎもこは
悲しき旅に
遠き旅にぞ
ぬば玉の
小暗き旅に
幾日をぞ
日を重ねけむ
いづち行きけむ

〔裏表紙裏〕

〔麹町 麹町区 上六番町 19〕

